

高崎市文化財調査報告書第96集

道場遺跡群

昭和61・62・63年度市営土地改良事業
道場地区に伴う埋蔵文化財発掘調査



1 9 8 9

高崎市教育委員会

序

古来より高崎市は北関東の要衝の地としての役割を果たしてまいりました。豊かな水源を抱く山々を後背にもち、川は人間の生活に必要な水と肥沃な土を提供して先人たちの生活を支えてきました。このことは市内に数多く存在する重要な遺跡が物語るものであります。

今回報告いたします道場遺跡群は、昭和61～63年度に施工された市営土地改良総合整備事業道場地区に伴う発掘調査であります。この地区も古代からの人々の生活の跡が多数発見されました。特に、中世のものとみられる居館址は、この地区が箕輪城主となった長野氏の本貫地であると推定されていることから貴重な資料となるものと思われま

す。最後に、発掘調査ならびに本書の刊行にあたり多大な協力と援助をいただきました関係諸機関、地元関係者各位に対し、深く感謝の意を表わすとともに、厳しい気候の中にもかかわらず発掘に参加した方々の労をねぎらい序と致します。

平成元年3月

高崎市教育委員会
教育長 茂田治男

目次

序

例言・目次

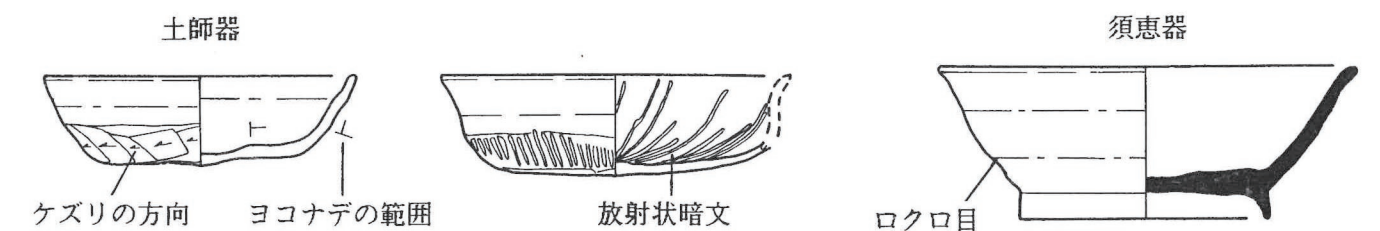
I. 発掘調査に至る経過	2
II. 周辺の地形と遺跡	2
III. 調査の方法と記録	4
IV. 調査の経過	4
V. 調査地域内の層位	5
VI. 遺跡の概要	6
VII. 長町・踏分遺跡	7
VIII. 谷津・道場遺跡	7
IX. 高田・館遺跡	27

例言

1. 本書は、昭和61・62・63年度に実施した高崎市営土地改良事業道場地区に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。遺跡は、高崎市浜川町字長町・踏分・谷津・道場・高田・館の各地区に広がっており、小字名をもって遺跡名とする方針から、それぞれ長町遺跡・踏分遺跡・谷津遺跡・道場遺跡・高田遺跡・館遺跡とし、包括して扱う場合は道場遺跡群とする。
2. 発掘調査及び整理作業は、高崎市教育委員会が文化庁補助金を得て直営事業として実施した。調査組織は、社会教育課文化財保護係
事務局 課長補佐 串田哲夫 専門員 横倉興一 主任主事 時田宣章 中沢寛哉
調査担当 主任主事 田村 孝 清水秀紀 調査員 斎藤圭子
3. 本書の執筆編集及び遺構・遺物の写真撮影は田村が行った。
4. 図版作成は、清水・斎藤・田村が、遺物の実測は田村が行った。
5. 発掘に際しての表土の掘削は井上工業、調査基準杭の設置はグリーン測量設計、空中写真の撮影は青高館にそれぞれ委託して行った。
6. 調査により得られた遺物・図面・写真等の資料は、高崎市教育委員会が一括保管している。
7. 発掘調査・整理作業にあたり下記の方々に御指導・御協力を頂いた。記して感謝の意を表する。(敬称略)
新井房夫・五十嵐信・磯部淳一・内田俊秀・近藤義雄・早田 勉・田口一郎・田中宏之・土屋喜英
藤沢典彦・藤澤隆子・右島和夫・光森正士・山崎 一・山本隆志・若狭 徹・土地改良実行委員会
農政部土地改良課・地元住民の皆様
8. 高崎市教育委員会発掘調査の遺跡番号で、長町・踏分遺跡は103，谷津・道場遺跡は111，高田・館遺跡は128になる。

凡例

1. 遺構は下記の記号で表記し、01からの番号をつけた。
SB=掘立柱建物址 SD=溝 SE=井戸 SI=住居址 SJ=畦畔 SK=土坑
SL=水田面 SX=性格不明遺構 SZ=古墳
2. 遺構平面図の北方向は、図4・5は磁北で、それ以外は座標北を示している。座標系は国土座標第IX系である。
3. 水田遺構の平面図は、畦畔の下端を太線で、上端を細線で表現した。また、等高線は5cm間隔で表し、標高の数値を示した。
4. 住居址・柱穴・溝・土坑・ピット等の平面図は、上端を太線で、下端を細線で表現した。
5. 土層断面図では、遺構面を太線で、他は細線で表現した。註記は基本土層に従うが、基本土層以外のものはその都度表記した。
6. 水田遺構のエレベーション図で↓は、畦畔の位置を示している。
7. 等高線・エレベーション・土層断面図の標高単位はメートルである。
8. 遺物写真の4桁番号は、前の2桁が図版番号を、後の2桁が図版内の個体番号を表している。
9. 遺物実測図の見方は以下のとおりである。



I 発掘調査に至る経過

高崎市街地の北部に位置する浜川町字道場を中心とする26.9haの地域で土地改良（高崎市営土地改良事業道場地区）の計画があることが文化財保護係にもたらされたのは、昭和60年8月のことであった。事業対象地域には、浜川の砦跡と関連遺跡・乙業館址・高田屋敷・来迎寺周辺中世遺構・集落址である館遺跡などの周知の遺跡が含まれていること、団体営浜川土地改良事業に伴う発掘調査で検出した平安時代水田址の続きが含まれていることなどが明らかであった。このため、これらの道場地区の埋蔵文化財包蔵地地図及びその状況などの資料を市農政部に提示し、文化財保護と土地改良事業の調整をはかるために協議を重ねた。この結果、昭和61年度冬期、62年度夏期、63年度夏期工事に係わって、破壊を受ける恐れのある埋蔵文化財の記録保存を実施することとなった。

II 周辺の地形と遺跡

榛名山東南麓は、火山噴出物を基盤とする扇状地形が発達し、相馬ヶ原扇状地と呼ばれている。その扇端部は標高110 m付近にあり、前橋・高崎の市街地がのる平坦な前橋台地へと移行していく。相馬ヶ原扇状地上には、その西を限る榛名白川をはじめとして井野川・唐沢川・天王川・染谷川などの中規模河川がいくつかの小河川を集めながら東南流している。本遺跡群は、このうちの井野川右岸に面した高崎市浜川町字長町・踏分・谷津・道場・高田・館に所在する。市街地の北方6 kmの榛名山東南麓に位置し、標高125 ～130 mを計測する。高崎市の北端にあたる地域で、北及び東で群馬郡箕郷町と群馬町に境を接している。

榛名山は古墳時代後期に2度の噴火を起こし、周辺地域に多くの被害をもたらした。本遺跡群付近では、二ツ岳の2度の噴火に伴う火砕流（FPF-1・FPF-2）及び二次的な洪水層が厚く堆積しており、現在の地形と旧地形では大きく様相を異にしていると推定される。周辺の遺跡としては、北東0.7km には、100m級の大型前方後円墳3基（井出二子山・保渡田八幡塚・保渡田薬師塚）からなる保渡田古墳群（群馬町）がある。最近の調査によれば、3基とも周堀内底面近くから二ツ岳降下火山灰（FA）層が確認されており、これら3基の古墳の築造時期はFA降下時を大きく遡るものではないことが明らかになった。北西0.5 kmにある下芝谷ツ古墳（箕郷町）は、一辺が下段基底部で約20m を測る二段築成の方墳で、上段は積み石で構成されている。埋葬施設は、墳丘ほぼ中央に頭位を北東に向けた竪穴式石室があり、副葬品として金銅製飾履・武器類・装身具・馬具類などが出土しており注目される。周堀及び古墳周辺の旧地表面は、FA降下に伴うFPF-1 の二次的洪水層によって埋没していることが判明した。また、東1.3km には古墳時代首長層の居館址として脚光をあびた三ツ寺I遺跡（群馬町）がある。館は既存の集落を強制的に排除する状態で5世紀第3四半期頃築造され、FA降下を契機として5世紀末～6世紀初頭に館の機能が停止したことが明らかになっている。さらに、東0.4 ～南1.4km には同道（群馬町）・御布呂・芦田貝戸・熊野堂（高崎市）の各遺跡が井野川に沿って並んでいる。これらの遺跡では、FAによって埋没した小区画水田址・畑址が発見されている。以上述べてきた古墳時代の各遺跡は、榛名山二ツ岳の1度目の爆発（FA噴出）に相前後する極めて近接した時期の所産であることが理解される。本遺跡群の谷津遺跡SZ01・02の2基の古墳はFA層に埋没しており、時期的にも位置的にも近接したものである。これらの遺跡を直接結びつける物証はないが、三ツ寺I遺跡の館の首長に関連する古墳や生産の場であったことは間違いのないであろう。

平安時代の遺跡としては、南東隣接地に館遺跡がある。住居址64軒が調査され、緑釉・灰釉陶器・鉄製紡錘車・石帯・砥石などが出土している。本遺跡群の道場遺跡でも平安時代の住居址が3軒検出されている。井野川右岸で館遺跡と同様な立地である。館遺跡は、この付近の拠点集落の可能性がある。他に、集落遺跡としては舞台遺跡が西0.8km に、石神遺跡が南西1km に位置する。また、平安時代水田址は長野北部遺跡群・菊地遺跡群・浜川遺跡群などが隣接しており一連のものと推定される。

中世の遺跡としては、いわゆる長野氏関連の浜川地区館址群があげらる。約2 km四方の範囲にわたり、寺ノ内館址・矢島館址・北新波の砦址・浜川の砦址・乙業館址・北爪の砦址などの館址が集中する。本遺跡群の道場遺跡の館址や高田遺跡などもこれらの一部と見られる。各館は、互いに有機的なつながりを持つものと見られる。



図1 周辺の遺跡分布図

1. 道場遺跡群
2. 長野北部遺跡群
3. 菊地遺跡群
4. 矢島館址
5. 館遺跡(集落)
6. 御布呂遺跡
7. 芦田貝戸遺跡
8. 寺ノ内館址
9. 北新波砦址
10. 同道遺跡
11. 保渡田古墳群
12. 三ツ寺I遺跡
13. 下芝谷ツ古墳

Ⅲ 調査の方法と記録

土地改良事業の対象地は、主要地方道高崎・榛名・吾妻線から東で一級河川井野川まで、団体営浜川北部圃場整備区域から北で箕郷町及び群馬町との行政界までの範囲で、東西に広い26.9haの地域である。発掘調査は土地改良の工事に先行して、当該年の工区について行われた。即ち、昭和61年度冬期に長町と踏分地区、62年度夏期に谷津と道場地区、63年度夏期に高田と館地区でそれぞれ実施した。

長町及び踏分地区は、対象地の西端に位置しており、テストピットの状況や浜川北部圃場整備に伴う発掘調査の成果から平安時代水田址が検出されることが推測された。また、工区西よりの所を北西から南東の方向に走る農道は、旧箕輪街道といわれており、道路遺構が発見される可能性があった。このため、A区からI区までの調査区を設定し調査にあたった。

谷津地区は、現地でのマッピングの結果、井野川寄りの桑畑で埴輪の散布がみられ、下芝谷ツ古墳のような洪水層下の古墳の存在が推定された。また、道場地区は乙業館址といわれている場所が工区にはいるため面的に調査する必要があった。このため、大きくA区・B区・C区に分け、遺構のでかたに応じてトレンチを設定した。

高田地区では、高田屋敷といわれる堀割をもつ一角が存在し、館地区では、浜川の砦の外堀推定地と館遺跡の隣接地が工区に含まれることから、ここでも大きくA区・B区・C区に分け、さらにトレンチを必要に応じて設定して遺構の確認・検出にあたった。

遺構実測の基準杭は、長町・踏分地区の調査は道水路の南北軸を主軸に任意のメッシュを組み、その他の地区では、国土座標第IX系の座標軸を主軸にメッシュを組み、それに従って実測を行った。標高は対象地に近接する四等三角点（浜川町字長町）標高129.07m から水準測量し、レベル原点を調査区に設定して使用した。検出した遺構の記録については、上記基準杭をもと平面図・土層断面図・エレベーション図等図種に応じて1/10・1/20・1/40の縮尺で実測した。写真は、モノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムともに35mmで撮影した。また、空中写真の撮影も実施した。

Ⅳ 調査の経過

長町及び踏分地区の調査は、昭和61年11月下旬より開始した。まず、対象地内の道路・水路予定地を中心に72カ所のテストピットを設定し、地下の様相を把握することから始めた。この結果、浅間山噴出のB軽石の遺存状況が良好で、平安時代水田址が検出されることが推測された。次に旧箕輪街道と推定される道路にトレンチを設定し、人力によつてその確認作業を行った。この後、掘削重機を搬入して道路・水路予定地の発掘に移った。冬季のため検出遺構の風化が激しいので、検出作業に並行して実測も実施した。12月中旬になり工事面積の追加があった。1月上旬に当初の予定地の調査を終了して、土地改良の工事に引き渡した。ひき続いて追加分の調査に入り、下旬には終了した。2月中旬から3月末まで図面・写真の点検及び整理やトレスなどの室内作業を行った。

第2年次の谷津及び道場地区の調査は、昭和62年の6月下旬より開始した。調査は、工期的に忙しい麦畑部分（1工区）から始める予定だったが、麦の収穫が終わらないために桑畑部分（2工区）の抜根から入ることになった。1工区は麦刈り終了と共に道路予定地の掘削に入った。ここは、雨水にたたられ調査の進行に著しく妨げになった。2工区及び3工区は、予測どおりに平安時代水田址・集落址・館址が検出されたほか、軽石流堆積物に埋没した古墳が発見された。遺構の種類が多く、かつ貴重な発見もあり当初より時間がかかったが、10月下旬には地元の人々を対象に古墳の説明会を実施し、調査を終了させることができた。調査終了後、11月末から翌年3月まで図面や遺物の整理作業を行った。

第3年次の高田及び館地区の調査は、昭和63年の6月下旬より開始した。対象地が広範囲であるため掘削重機により試掘を行うことから入った。A区と呼ぶ高田地区の北部では平安時代水田址が確認された。B区と呼ぶ高田地区の南部が高田屋敷跡の推定地である。その中心部に試掘を入れたところ、ピット・溝跡・五輪塔などが検出されたために拡張して調査にあたった。また、その規模・遺構配置などを調査するため2～9トレンチを発掘



図2 周辺の地形と調査区位置図

した。A区は1工区であるため7月末までに終了させ引き渡した。B区は広範囲な調査区であると共に遺構密度の高いところで、慎重な調査が要求されたが、異常な長雨のため十分な調査ができなかったものの、9月中旬まで調査を行い一応の成果を上げた。C区は、浜川の砦跡の隣接地区であることから関連遺構が予測されていた。ここでは、堀跡が主に検出されたが、7月以来の長雨が続けていたため調査は困難を極めた。調査は、10月初旬に終了した。10月上旬より翌年3月まで断続的に資料の整理・報告書作成などの作業を行った。

V 調査地域内の層位

3カ年にわたる発掘調査の対象地は、前述したように広範囲に及び、地形にも多少の違いも見られる。ここでは、各調査年度ごとに基本土層をみておくことにする。

長町・踏分遺跡 (A～I区)

I
II
III
IV
VI
V
VII
VIII
IX

図3-1 基本土層図

- I 暗褐色土 現耕作土。
- II 茶褐色土 鉄分沈着層。浅間A軽石を含む。
- III 灰茶褐色土 浅間A軽石を多く含む。ややザラつく土質。
- IV 灰黒色土 浅間B軽石を含むためザラザラの土質。
- V 黒色土 浅間B軽石を含む。当時の低地に堆積が見られる。
- VI 浅間B軽石層 場所によってはB軽石の上に淡紫色灰層が見られる。
- VII 黒色土 粒子の細かい土で、場所によっては細い根や細長い葉も残る。B軽石下水田址耕作土。
- VIII 暗灰色土 径3～5mmの灰白色パミスを多く含む。
- IX 淡黄褐色砂質土 微砂で角閃石安山岩の円礫を含む。

谷津遺跡 (A区)

I
II
III
IV-1
IV-2
V
VI
VII

図3-2 基本土層図

- I 暗褐色土 現耕作土
- II 暗茶褐色土 浅間B軽石・黄褐色の粒子を多く含む。二ツ岳軽石も少し含む。
- III 黒褐色土 浅間B軽石を主体に含む層でIV-2層やIV-1層をブロック状に混入する。
- IV-1 淡紫色灰
- IV-2 B軽石
- V 黒褐色土 B軽石下水田址耕作土。場所により色調が茶褐色を呈する。
- VI 暗黄褐色土 VII層と暗褐色土の混じる土。
- VII 黄褐色土 軽石流堆積物の再堆積層。場所により軽石を主体にしたものや砂質土であったりする。

谷津遺跡 (B区)

I
II
III
IV
V

図3-3 基本土層図

- I 暗褐色土 現耕作土
- II 茶褐色土 鉄分沈着層
- III 黒褐色土 浅間B軽石を多く含む。
- IV 暗褐色土 灰白色パミス(径2～3mm)を含む。
- V 黄褐色土 軽石流堆積物の再堆積層。場所により砂質土であったり、角閃石安山岩であったりする。

道場遺跡 ((C区))

I
II
III
IV
V
VI

図3-4 基本土層図

- I 黒褐色土 現耕作土
- II 暗茶褐色土 暗褐色土と茶褐色土の混土層。二ツ岳軽石を少し含む。
- III 黒褐色土 浅間C軽石や二ツ岳軽石、黄褐色砂質土の小ブロック等混入する。
- IV 暗褐色土 粒子均質な土で、少し含む。

I
II
III
IV
V
VI-1
VI-2
VII
VIII
IX

図 3－5　基本土層図

V　茶褐色土　ローム漸移層

VI　黄褐色土　ローム

高田・館遺跡　（A～C区）

I　明黒褐色土　現耕作土。浅間A軽石を含む。

II　茶褐色土　鉄分沈着層。浅間A軽石を含む。

III　灰茶褐色土　浅間A軽石・二ツ岳軽石を含む。

IV　暗茶褐色土　浅間B軽石・二ツ岳軽石を含む。黄褐色土小粒多く混じる。

V　黒褐色土　浅間B軽石多く、二ツ岳軽石少し含む。黄褐色土小粒やVI-1層の小ブ
ロックが混じる。

VI-1　淡紫色灰

VI-2　浅間B軽石

VII　黒褐色土　粘性をもつ。径5mm以下の二ツ岳軽石を多く含む。黒色土のところや
黄褐色土のところがあったりして一様の色調ではない。B軽石下水田
址耕作土。

VIII　灰褐色土　やや粘性をもつ。VII層同様二ツ岳軽石多く含む。

IX　黄褐色土　黄褐色砂と径3～30cm程の二ツ岳軽石より成る。二ツ岳軽石流堆積物
層。

VI　遺跡の概要

道場遺跡群の3カ年にわたる発掘対象地には、調査以前の現地踏査や遺跡台帳などから多数の遺構や遺物の検出が予測されていたが、やはり縄文時代から中世に至るまでの遺構・遺物を多数検出した。主な概要を記す。

古　墳

谷津A区で2基検出した。S Z 01は低墳丘の張り出しを持つ円墳で、S Z 02は大部分が対象地域外のため形状は不明である。いずれも榛名山二ツ岳の火山灰に被覆され、厚い軽石流堆積物に守られるような状況で遺存していた。地元の人の話や道場C区で埴輪片が出土していることから、このほかにも数基存在した可能性がある。

浅間B軽石下水田址

長町・踏分・谷津A区・高田の各遺跡で検出した。井野川右岸の道場C区・現集落の南縁の谷津B区以外で広範囲に広がるものと見られる。さらに、西は長野北部遺跡群、南は浜川北部遺跡群で検出した水田址に続いていくと推定される。館遺跡C区でも水田址そのものの検出はなかったがB軽石に埋没した流路が見つかっており、関連するものと見られる。

集落址

道場C区で3軒の平安時代住居址を検出した。C区北側調査区では、多数の土器片が出土しており付近には住居址が広がっているものと推定される。昭和52年度に調査した館遺跡では、平安時代住居址64軒が検出されているが、道場C区の立地と同様であり、井野川右岸に集落が展開しているものと見られる。

館　　址

道場C区と高田B区で中世館址を検出した。調査前の現況でも掘割りが痕跡をとどめており、山崎一氏の『群馬県古城塁址の研究』等によれば、それぞれ乙葉館址および高田屋敷とされている。道場C区の館址は、堀とそれにそう土塁の基部、掘立柱建物址3棟、ピット、土竈などが検出された。高田B区のものは東西約116 m、南北108 m以上の範囲が幅5～7 mの堀に囲まれており、ここから掘立柱建物址が18棟以上、柵列、ピット、土竈、井戸などが検出された。遺物としては、五輪塔・宝篋印塔・古銭・かわらけなどが出土しているが、軟質陶器の内耳鍋・すり鉢・石臼などの生活の臭いのする遺物が比較的少ないようである。また、井戸脇から出土した聖観音座像は注目に値するものである

VII　長町・踏分遺跡

1．浅間山B軽石下水田址

水田址は長町遺跡・踏分遺跡のA～Iのすべての調査区で検出された。この水田址は天仁元年（1108）に発生したと推定される浅間山大噴火の際に噴出された軽石（浅間山降下B軽石）により直接埋没していたものである。以下、各調査区ごとに状況をのべる。

A区は遺跡地のほぼ中央に位置する長さ171 m、幅5.5 mの南北に長い調査区である。現地表下50～90cmで遺構面に達する。B軽石の遺存状況は10～15cmで良好であった。21本の畦畔・18枚の水田面を検出した。調査区の形状から水田一区画を全掘できたものはなかったが、南北方向に長辺をとる長方形を呈するものと思われる。水田一面内はほぼ平坦であるが、隣接する水田面とでは5～10cm程の比高差が認められる。S J 12からS J 16にかけての水田面には多数の小穴が見られた。径10cm前後、深さ3～6 cmを測る。性格は不明。他に調査区南端から60m北で幅9 m、深さ0.5 mの東西走行の自然流路が確認されたが、水田に直接結びつく水路はなかった。

B・C区はA区の西60m余りに位置する。両調査区とも小範囲でしか確認していないため多くの情報はえられなかったが、現地表下1 mで水田址が検出された。A区の水田面と違い北東から南西への傾斜が見られた。

D区はB区の南35m程に位置する。B軽石はS J 01以北では確認されなかったが、南では5～20cm程あり、良好に遺存していた。9本の畦畔・8枚の水田面を検出した。ここでは、S J 04付近からS J 02にかけて歩行状況を示す足跡が確認できた。南から北へ歩いているもので、明確な足形よりも楕円形に近いものが多かった。

E区はD区の西10mに位置する調査区で、現地表下50～90cmで水田面に達する。B軽石は10～20cmもあり、良好であるが、現水路に隣接しているため冬季でも湧水が多く調査が大変であった。S J 01から北12m程の間はE区内で最も高い部分で、北側で浅く落ち込む状況があり、水田面とは異なる様相を示す。自然流路の両側にしばしば見られる無耕作地と同様のものであろうか。

F区はA区の東60m余りに位置する。水田面までは現地表から60～80cmで、B軽石の厚さは15～20cmを測る。B軽石の上には、一連の火山活動で降下した淡紫色灰も層として確認できるほど良好な遺存状況である。2本の畦畔と3枚の水田面を検出した。やはり一区画を全掘できたものはなかったが、南北5 m・東西9 m以上の東西に長辺をとる長方形を呈するものである。水田面はほぼ平坦で、畦畔は片方のみ落ちる形態のものである。水口や水路などの施設は確認されなかった。

G区はF区の南100 m程に位置する。ここでは、2本の畦畔・3枚の水田面以外に上幅80cm・深さ12cm程の東西走行の水路を1本検出した。南辺に幅80cm・高さ15cm程の土堤状の施設がつく。G区で検出した水田面より高いところに位置するため、南から東に広がると推定される水田に給水する機能ももっていたものと考えられる。

H区はF区の東70m程に位置する。ここはB軽石の残りが悪く、南西隅で水田が小範囲に検出されたのみである。ただ、調査区全域にわたって径10cm前後・深さ3～5 cmの小穴が多数検出された。A区のものと同様か。

I区はF区の南7 mに位置する。調査区の北半分は現耕作で削平されており、南半分で畦畔1本・水田面1枚が検出されただけである。

VIII　谷津・道場遺跡

1．古　墳

（1）　1号墳（S Z 01）

谷津遺跡A区北端（谷津755 番地）で検出された。井野川の右岸130 mに位置し、調査前には埴輪の散布があったものの平坦でマウンドなどは確認できなかった。

●墳丘及び外部施設

本古墳は、葺石根石を計測の基準にすると、径6 m 90cmの円墳に、前幅5.3 m・長さ3.7 mの造り出しが北側につく造り出しを持つ円墳である。長軸はN－25°－Wを測る。古墳は二ツ岳降下火山灰（FA）によって5～8 cm程被覆された後、10cm程粒子の細かいやや粘性を持つ土があり、これに続いて0.4 ～1.5 mの厚さで二ツ岳軽

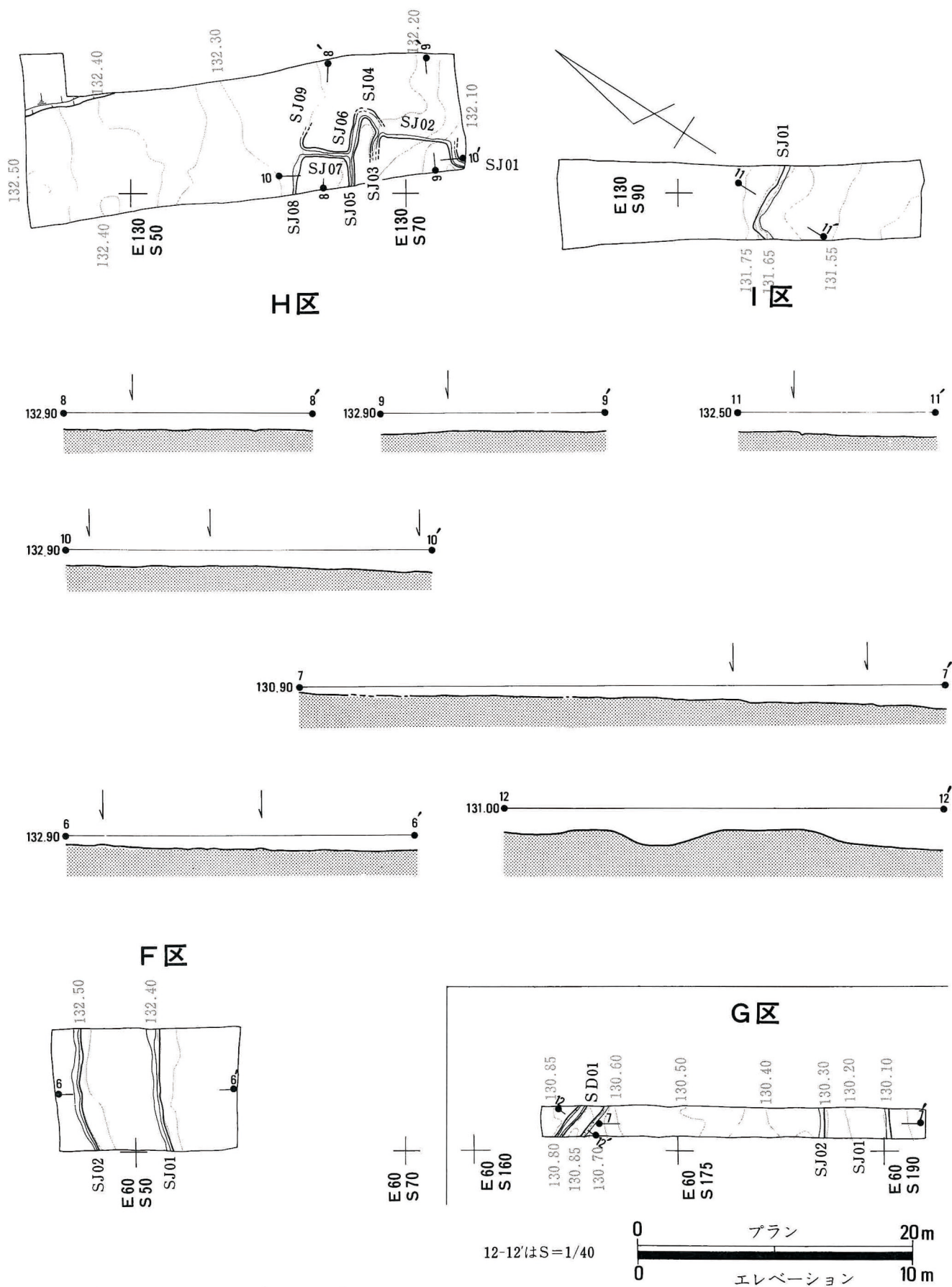


図4 B軽石下水田址実測図 (F~I区)

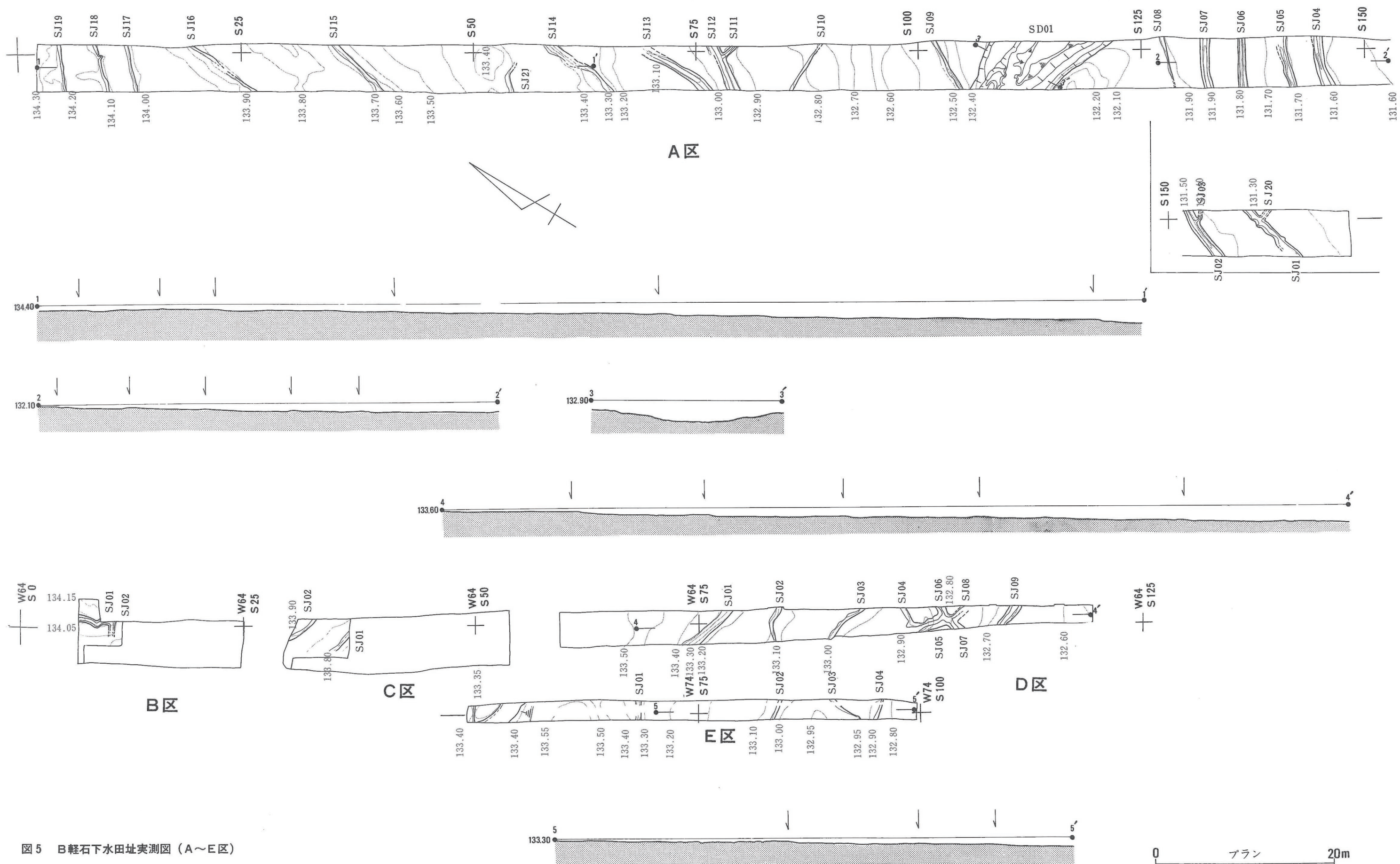


図5 B軽石下水田址実測図 (A~E区)

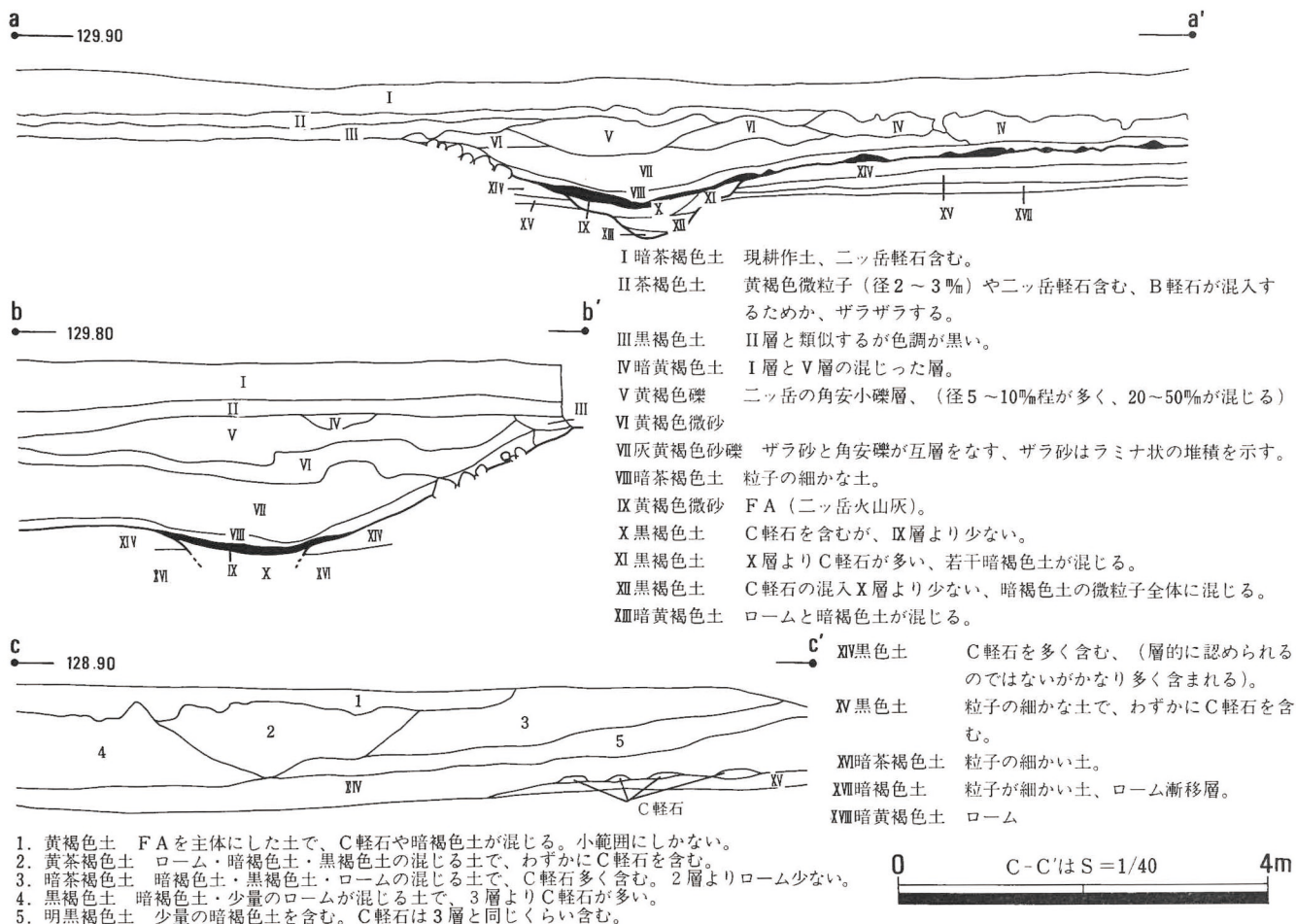


図6 SZ01土層断面図

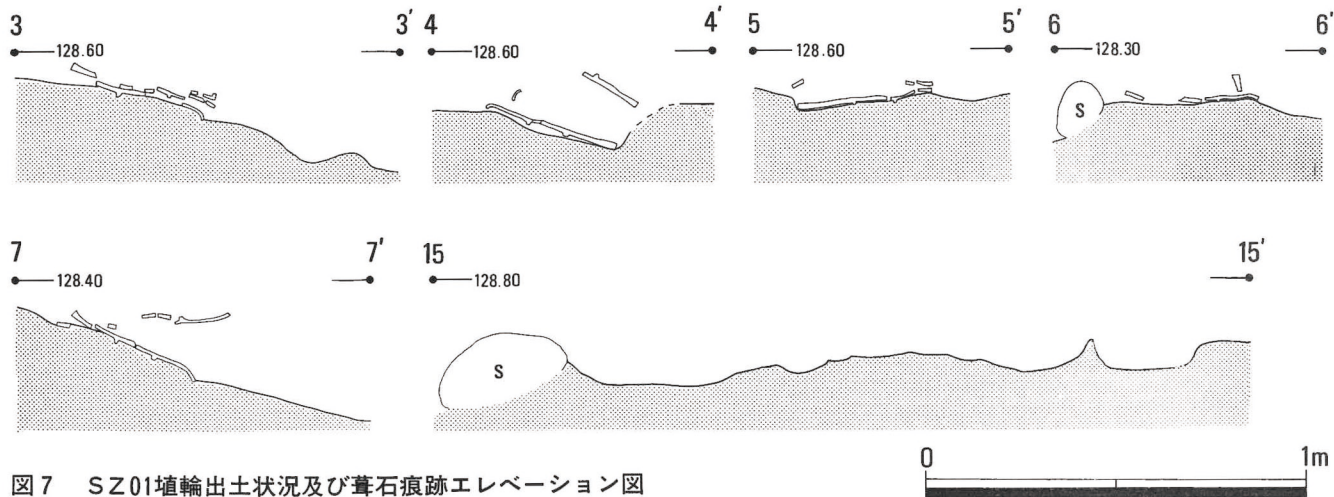


図7 SZ01埴輪出土状況及び葺石痕跡エレベーション図

石流堆積物層によって埋没している。現耕作により破壊されている部分があるものの比較的良好に遺存していた。古墳の構築面は、当時の地表面と考えられる浅間山降下C軽石を多く含む黒色土上である。この黒色土を追跡してみると構築当時の地形は南西方向に緩やかな傾斜をもっていたことがわかる。この斜面上に古墳を構築しており、不安定な場所を選地している。傾斜地に古墳を造っているため、南から西にかけての低い場所には盛土を多平坦になるようにしている。このためか葺石の根石も東より南西のほうが設置レベルが低くなっている。古墳の高さは、造り出し部で約40cm、円丘部は現耕作で破壊されているが約40～80cm程遺存していた。

円丘部斜面は河原石による葺石で覆われている。葺石は、当時の地表面に20～45cm程の大きい石を選んで根石として据え、根石より上はやや小振りの石を葺いている。葺石の遺存状況は良好で、東側で5～8段、西側で6～

10段を残していた。葺石根石列をたどるときれいな正円を描くが、造り出し部つながる部分において根石列が円丘中心寄りに設置されているため、やや正円が凹む状況になる。この部分は、葺石の設置レベルが東や西に比べて30～50cm程高くなっている。これは、造り出し部の上面に葺石の根石を据えたためである。調査時点では、すでに葺石根石もなくその痕跡が6石分残っただけであるが、構築当時は他の部分の葺石に比べて段数が当然少なかったはずである。また、葺石全体を見渡すと、根石から上まで縦に線がとおっている石積みが見られる。これは約70～90cmの間隔で見られるもので、その間の部分は石の大小に従って詰めているようである。造り出し部の葺石は、北面のみに見られ、東面と西面では確認されなかった。崩落した状況も見られないことや葺石の根石列が円丘部でまわってしまうことなどから当初より葺かれなかったものと推測される。北面の葺石は、造り出し部が低いので3～4段葺いてあるだけである。

円丘部の盛土は、当時の地表面の上に直接行われている。そのための土は周堀を掘削することにより得られたものであり、特別な土は見られない。40～60cm程残っていた。造り出し部の盛土も同様で、地表面の上に20cm盛り上げていた。

周堀は、造り出し部を除いて平面形Cの字状に存在する。規模は上幅2.0～2.2 m、深さ60cmを計測する。断面形は浅いUの字状で、中位で段をもっている。堀底のレベルも構築面に対応して南西方向に低くなっている。造り出し部北面の堀は、上幅50cm、深さ30～40cmほどのもので、周堀というよりは葺石根石を据えるために掘り込んだものと見られる。さらに、本古墳の周堀については、造り出し部についても円丘部をめぐる周堀が存在していたことが判明した。これは墳丘の立ち割り調査を長軸線上で実施したところ、造り出し部葺石の根石から内側90cmのところから、上幅1.6 m（現状）、深さ80cmの規模を持つ東西方向の溝の一部を検出した。溝は古墳構築面から掘込まれており、断面形は底面が平らで中位で段を持っている。溝の発掘は一部であったが、溝の部分の盛土が若干陥没しており、等高線の走り方からも造り出し部を横断し、周堀に続いていくことが明らかである。当初は円形に周堀が巡っていたと判断される。

●埋葬施設

円丘部のほぼ中央で径2～7cm程の小さな円礫が多く出土した。東西約1.8 m、南北約0.9 mの範囲に集中しており、この分布範囲の東と西には径約15～20cmの少し大きめの河原石が2個残っていた。盛土の中や周囲には小さな円礫が全く存在しないことや他には埋葬したと考えられる場所がないことから、ここに埋葬施設があった可能性が高いといえよう。現在の耕作がこの面まで到達しており、埋葬施設がどのようなものであったかは、明らかにできないが、竪穴系の主体部であったものと推定される。

●周堀東側の高まり

円丘部周堀東側で約4×6 mの範囲で10～15cm程高い部分が楕円形状に検出された。この部分は、断ち割り調査の結果、当時の地表面に盛土されたものであることが判明した。ここからは高坏脚部・小型埴底部・くびれ部から口縁部にかけて透し孔と思われる切り込みをもつ小型壺などの破片が出土している。二ツ岳火山灰（FA）に被覆されており、原位置から多く動いているとは考えにくいし、盛土をして高まりを作っていることなどから特別な意識を持って置かれたものと見るができる。この部分の性格は明らかにしがたいが、祭祀との関連も含めて今後問題となる場所であろう。

●出土遺物

本古墳からの出土遺物は、前述の周堀東側の高まりで出土した土器以外は、埴輪だけである。埴輪は円筒埴輪のみで人物や器材などの形象埴輪は見られない。出土位置は、円丘部周堀覆土中と造り出し部上面である。このうち、造り出し部で検出された円筒埴輪は、葺石寄りの長軸線上で1本（埴輪No.4）、北東角に1本（埴輪No.2）、これの長軸線寄りに1本（埴輪No.3）、北西角に1本（埴輪No.5）、これの長軸線寄り1本（埴輪No.6）、円丘部と造り出し部の接合する長軸線上で1本（埴輪No.7）の合計6本である。埴輪No.7を除く5本は、口縁部から基部まであり、その出土状態から見ても原位置であると推定される。この5本は、長軸線を挟んで左右対称に樹立されていたことが判断される。この他、円丘部と造り出し部の接合部東側周堀覆土中から1本（埴輪No.

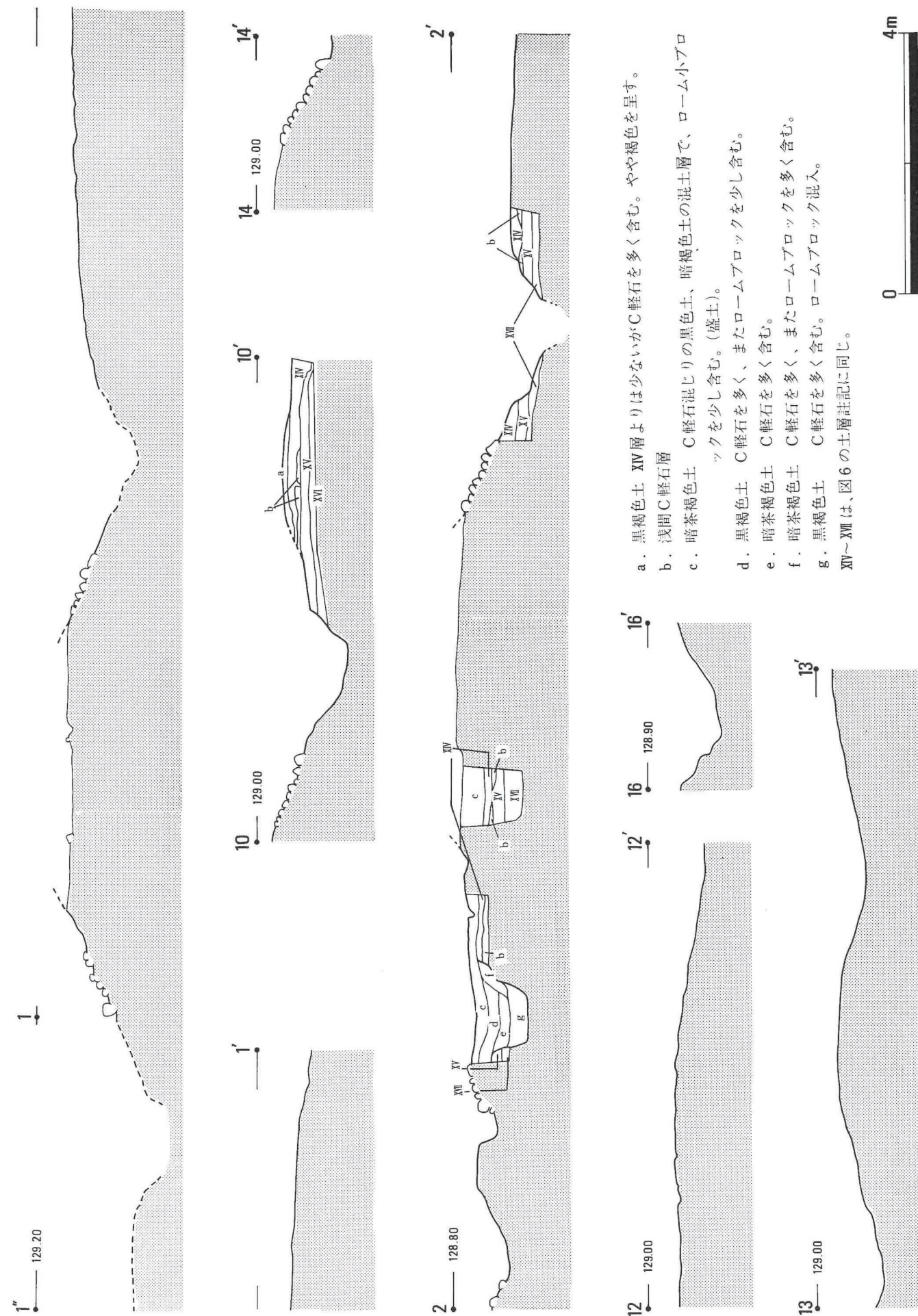


図8 SZ01墳丘EHレベルシヨシ



図9 SZ01遺物出土状況平面図

8) が、円丘部南東周堀覆土中で1本(埴輪No. 1)が崩落した状態で出土している。後は、破片が周堀から出土している。古墳の規模が小さいせいかわ埴輪の数も少ないようである。

次に、埴輪No. 1～8について若干見ておくことにする。埴輪の高さは、計測できる5本を見ると、35cm程ではほぼ同じ高さである。埴輪の胎土は、粒子の細かい粘土を使っており、いわゆるつなぎになる砂礫がほとんど見られない。また、歪んだり、傾いたりしているものが多い。この他の特徴として、埴輪No. 1・5・7・8は、筋の明瞭なハケ目で、埴輪No. 2・3・4・6はヘラナデのような筋の不明瞭なハケ目である。透孔は、不明な埴輪No. 7以外は半円形である。埴輪No. 1・5・8の口縁部付近には、左上から右下への長さ7cm程の2本平行線によるヘラ記号が認められる。埴輪No. 2・3・4・6は口縁部の第2突帯近くに径2～3cmの小円孔が見られる。ここで注意されることは、ハケ目とヘラ記号・小円孔の関係である。ハケ目の明瞭な埴輪には、ヘラ記号が見られ、ハケ目の不明瞭な埴輪には小円孔が見られるようである。

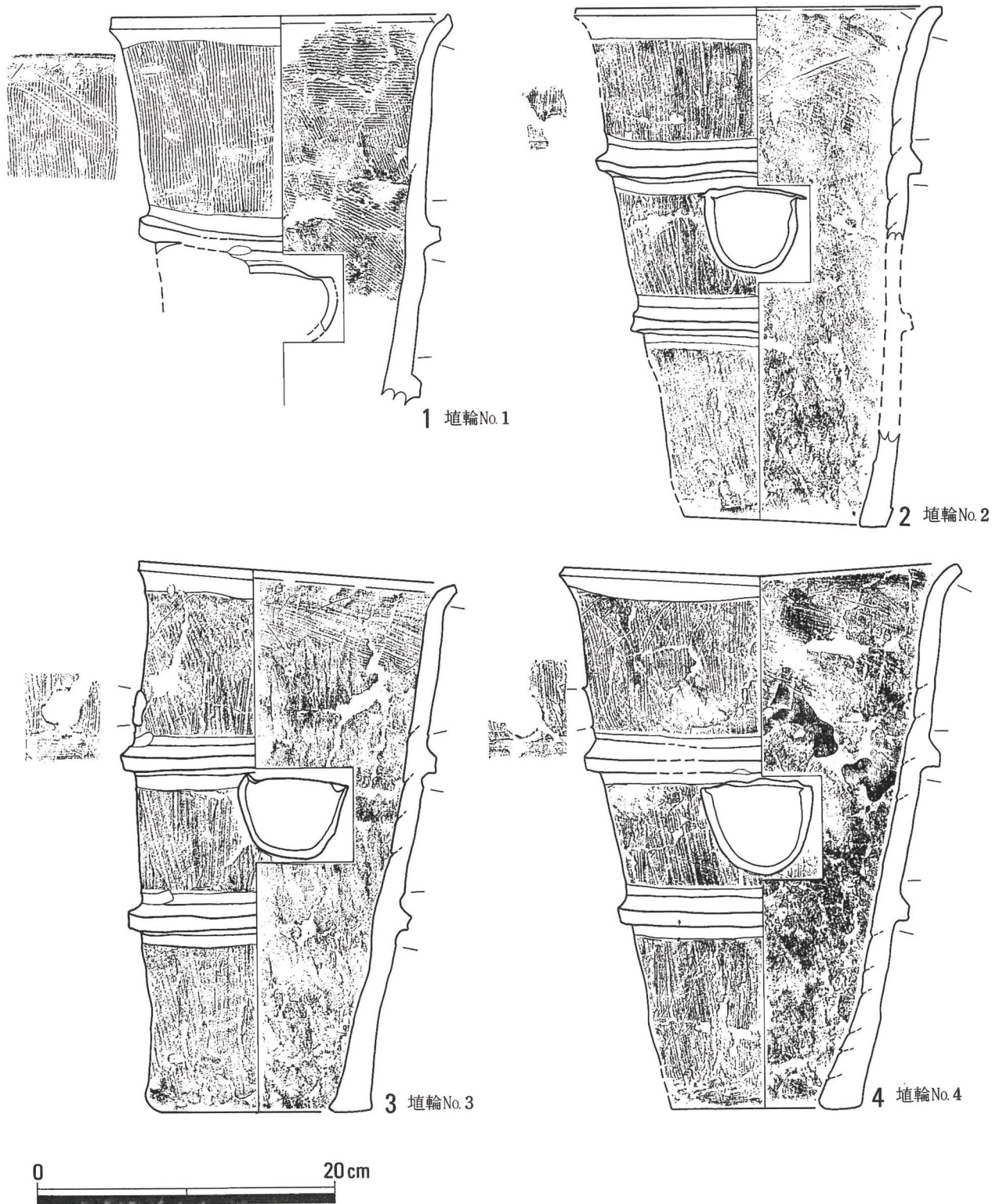


図11 SZ01出土遺物実測図①

●構築時期

周堀の中で底面から約30cm上で検出されたほかは、古墳や埴輪を直接被覆する状況で二ツ岳火山灰（FA）が5～8cm程の厚さで堆積しているのが確認された。従って、古墳が構築されてから余り時間が経過しない時期に二ツ岳の噴火があったと判断される。二ツ岳の噴火の時期を5世紀末とする考え方に立てば、その直前に構築されたものと言えることができる。

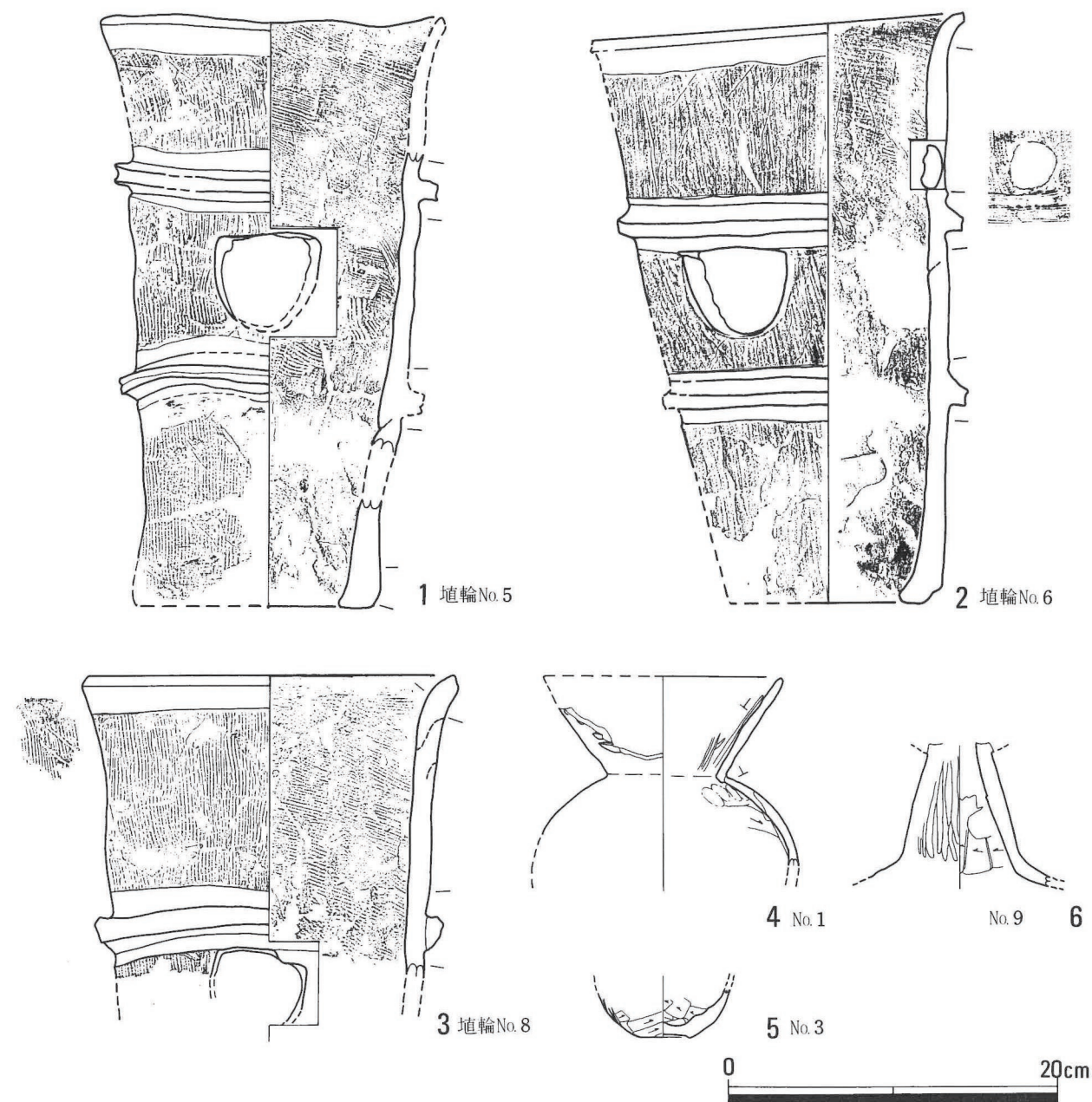


図12 SZ01出土遺物実測図②

(2) 2号墳 (SZ02)

1号墳の北側に隣接して発見された古墳である。一部が調査対象地内にあるが、ほとんどが対象地外の群馬町分に広がる。1号墳と同様に調査前には全く確認できなかった。

●墳丘及び外部施設

前述したように一部分の調査であったため、本古墳の形状・規模などは明らかにすることはできないが、確認できた葺石の根石列から推定復元をしてみると、径18mの円が描ける。円墳か前方後円墳か形状は不明であるがこれだけの規模を持つ古墳であることが判断される。

古墳の構築面は、SZ01と同じで当時の地表面と考えられる浅間山降下C軽石を多く含む黒色土上面である。

墳丘斜面は河原石による葺石で覆われている。葺石は、上下2段見られる。上段葺石は、高さ60～70cm、傾斜角度25°を測り、8～10段の石が残っている。地表面に径20～30cm程の大きい石を根石として据え、上の石はやや小振りの石を葺いている。SZ01と同様に根石から上まで縦に線がとおっている石積みが見られる。これは、約170cmの間隔で見られる。SZ01の葺石と違うところは、縦に線が通る部分の石の大きさが根石の大きさと大

差ないことである。間に入る石はやや小振りで同様である。下段葺石は、高さ20～30cm、傾斜角度18～22°を測り、構築当初から3～4段の石積みである。こちらも縦に線がとおる部分がみられ、石の大きさに大差がない。葺石を全体的にみたとき、根石に大きな石を選んでいる様子はなく、上の石と同様の大きさであることがわかる。下段葺石の設置面は、当時の地表面ではなく根石から2～3段目の石までローム上に据えている。従って、地表面を削り込んでいるということになる。このようにみてきたとき、下段の葺石は墳丘を被覆すると言うよりは周堀の斜面に葺いていると見たほうが良いと思われる。

盛土は当時の地表面の上に直接行われており、厚さ30cm程遺存していた。

周堀は前述したようなことから、下段葺石上端まで含めて、上幅約2m、深さ約30cm、底面が平らな浅いUの字状の断面形を呈している。

●埋葬施設

調査区の範囲では検出はなかった。

●出土遺物

本古墳からの出土遺物は、埴輪と土器があった。埴輪は、SZ01と同じく円筒埴輪のみで形象埴輪は見られない。出土位置は、上段葺石と下段葺石との間のは幅1m足らずのテラス状の部分から埴輪No.1・3・7が、上段葺石上から埴輪No.5・6、下段葺石上から埴輪No.2・4・8が出土している。これらのうち、No.1・7は樹立されたままの状態出土し、それぞれ埴輪No.2と8が接合した。埴輪No.3・4・5も接合し1本の埴輪になった。こうしてみると、SZ02の埴輪の配置は、上段葺石の上の面と下段葺石との間のテラス上の面に行われていたことがうかがえる。他に、2トレンチの覆土中からC種ヨコハケをもつ埴輪片と薄手でハケ目の細かい埴輪片が出土している。土器は周堀中から小型壺1個体 (No.2)、坏2個体 (No.4・5) が近接した位置で出土している。いずれも周堀の底面から5～8cm程上からの出土である。

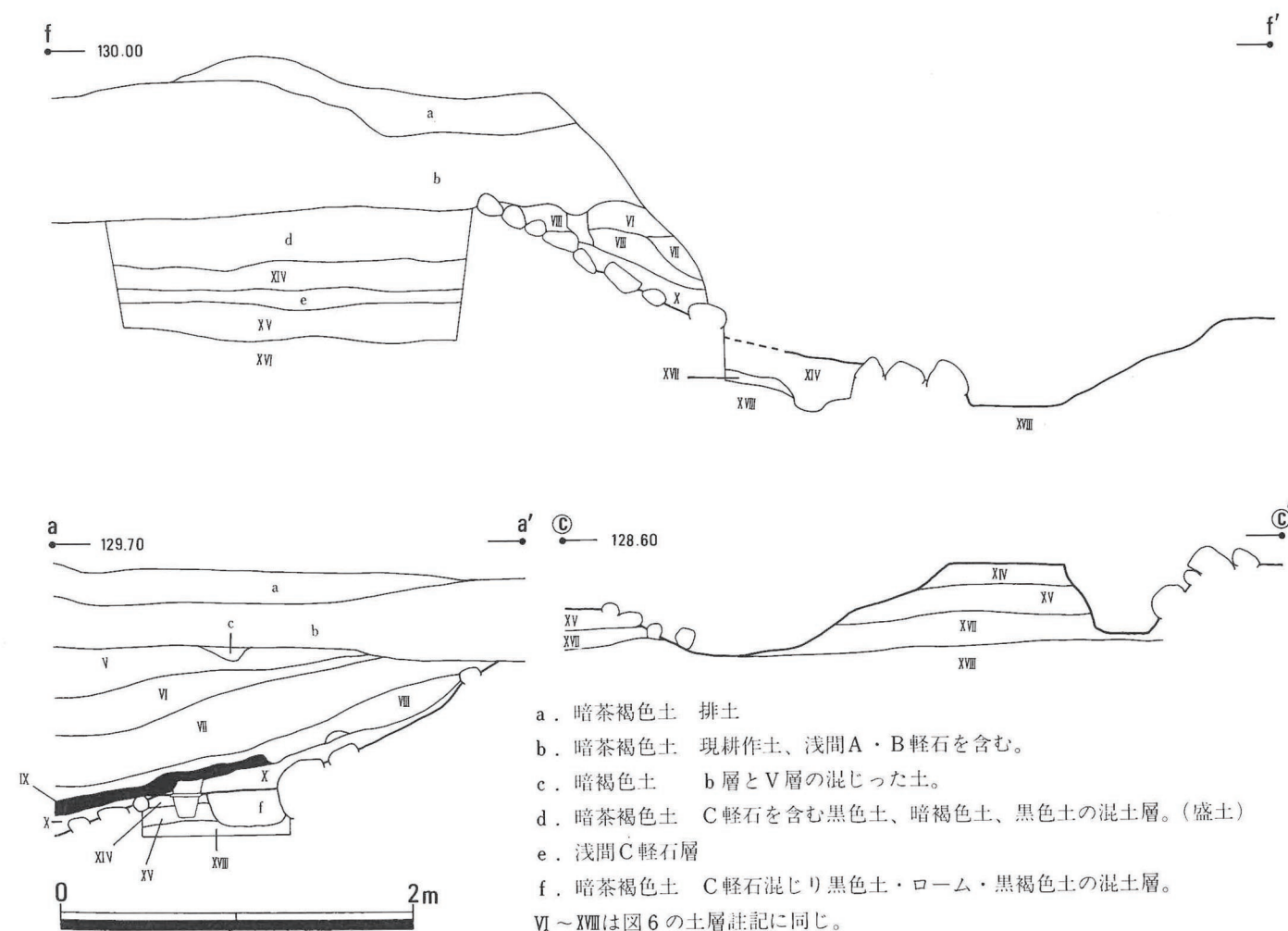


図13 SZ02土層断面図

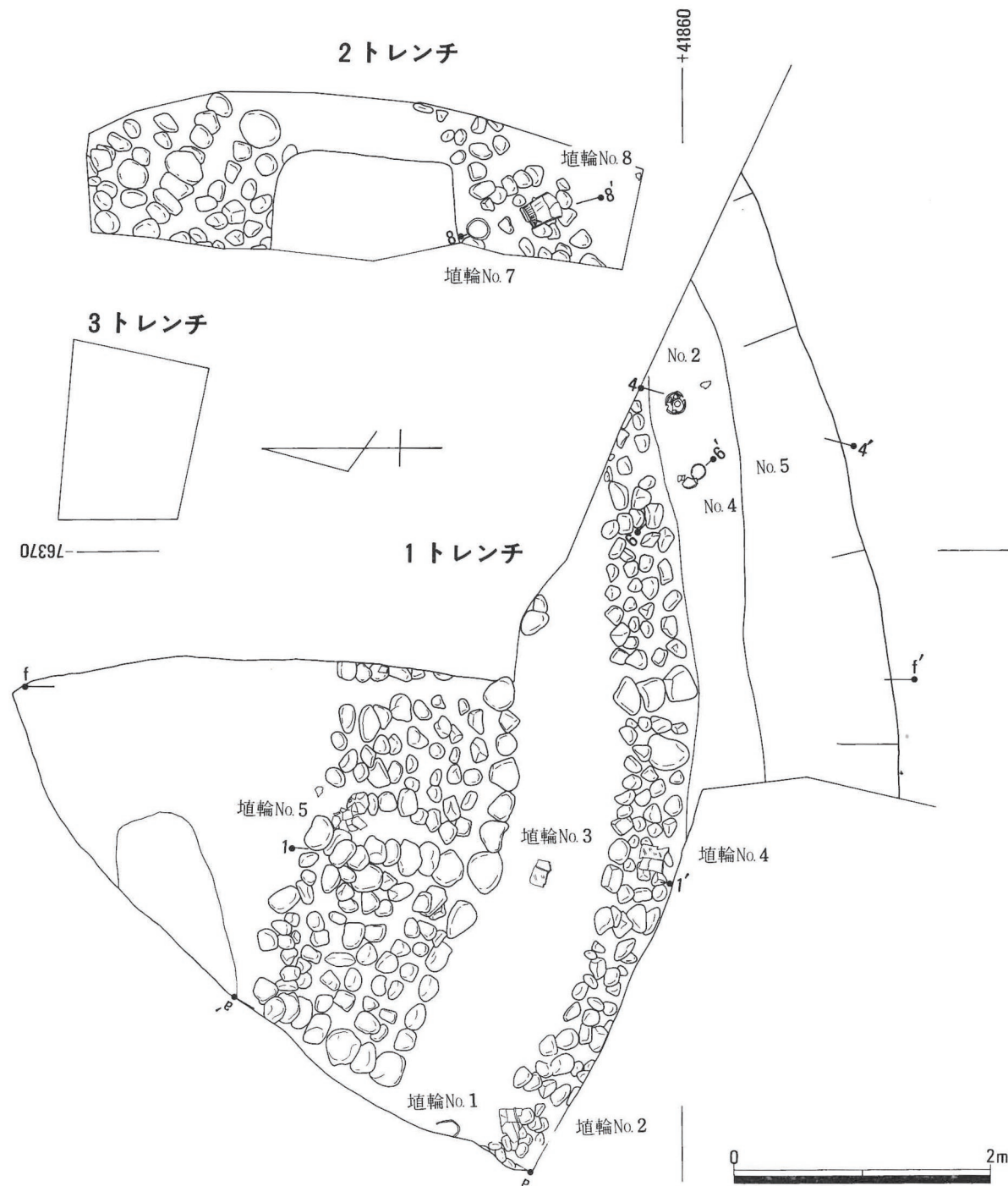


図14 SZ02遺物出土状況平面図

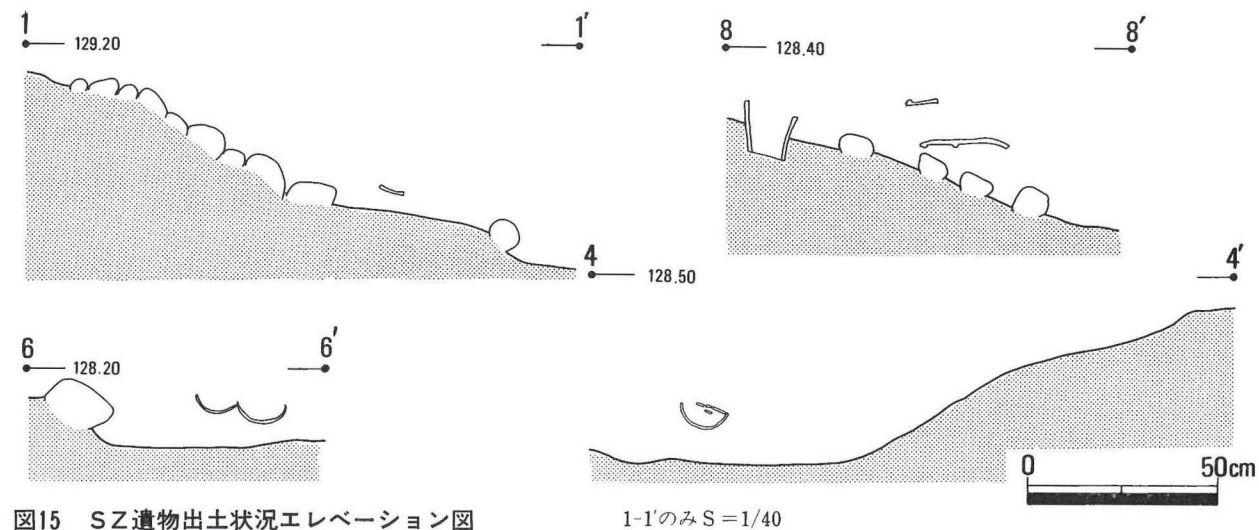


図15 SZ遺物出土状況エレベーション図

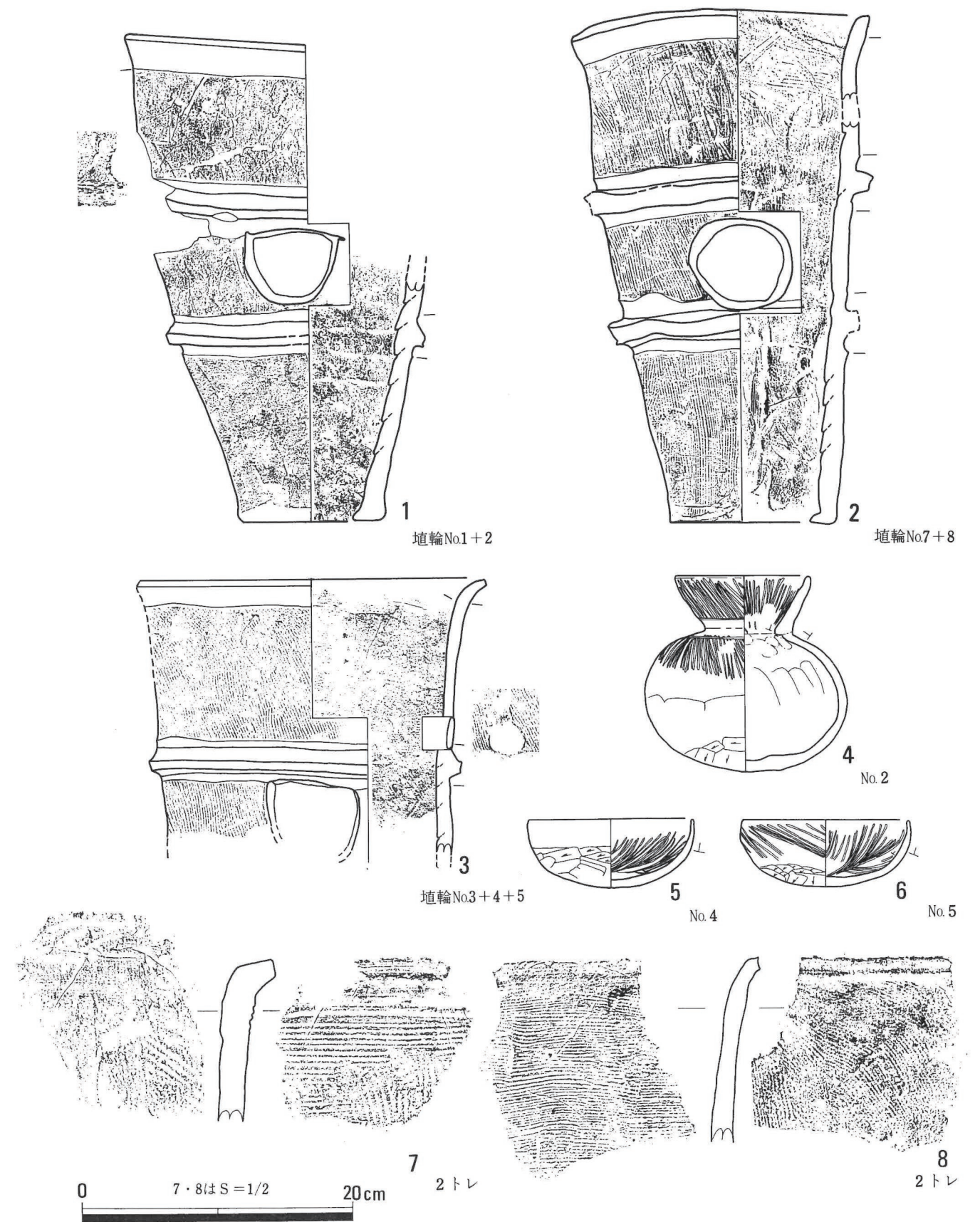


図16 SZ02出土遺物実測図

●構築時期

SZ02の構築面はSZ01と同じ面であるが、SZ01は造り出し部上面や葺石下部を二ツ岳火山灰層が直接被覆していた。SZ02では、葺石の上は浅間C軽石混じりの黒色土が約10cm堆積して、二ツ岳火山灰層が被覆している。SZ01と同様な時期だが、若干SZ02の方が先行するものと推定される。

2. 住居址

井野川右岸上に位置する道場遺跡C区で4軒の住居址が検出された。3軒（S I 01・03・04）は平安時代，1軒（S I 05）は一部の調査のため時期は不明であった。C区北側調査区は，多数の土器片が出土しており，周辺には集落が広がっているものと推測される。

（1） 1号住居址（S I 01）

C区南側調査区のほぼ中央で検出した住居址である。南北3 m 50 cm，東西3 mの長方形の平面形を呈する。長軸方向はN-5°-Eを測る。壁高は，現状で15~25 cm程で残りはあまり良くない。カマドは，東壁中央やや南寄りにあり，壁を掘り込んで構築している。黒色灰が分布する。貯蔵穴は，カマドの南，南東コーナーに位置する。規模は，40×50 cm，深さ10 cmである。柱穴は確認されなかった。カマドの北80 cm程に20×30 cmの角閃石安山岩が，また，住居址中央やや西寄りの所で径10 cm程の角閃石安山岩が出土している。遺物は，カマド及び貯蔵穴付近から多く出土している。土師器コの字口縁甕形土器・小型台付甕・坏，須恵器坏・高台付椀などがあげられる。

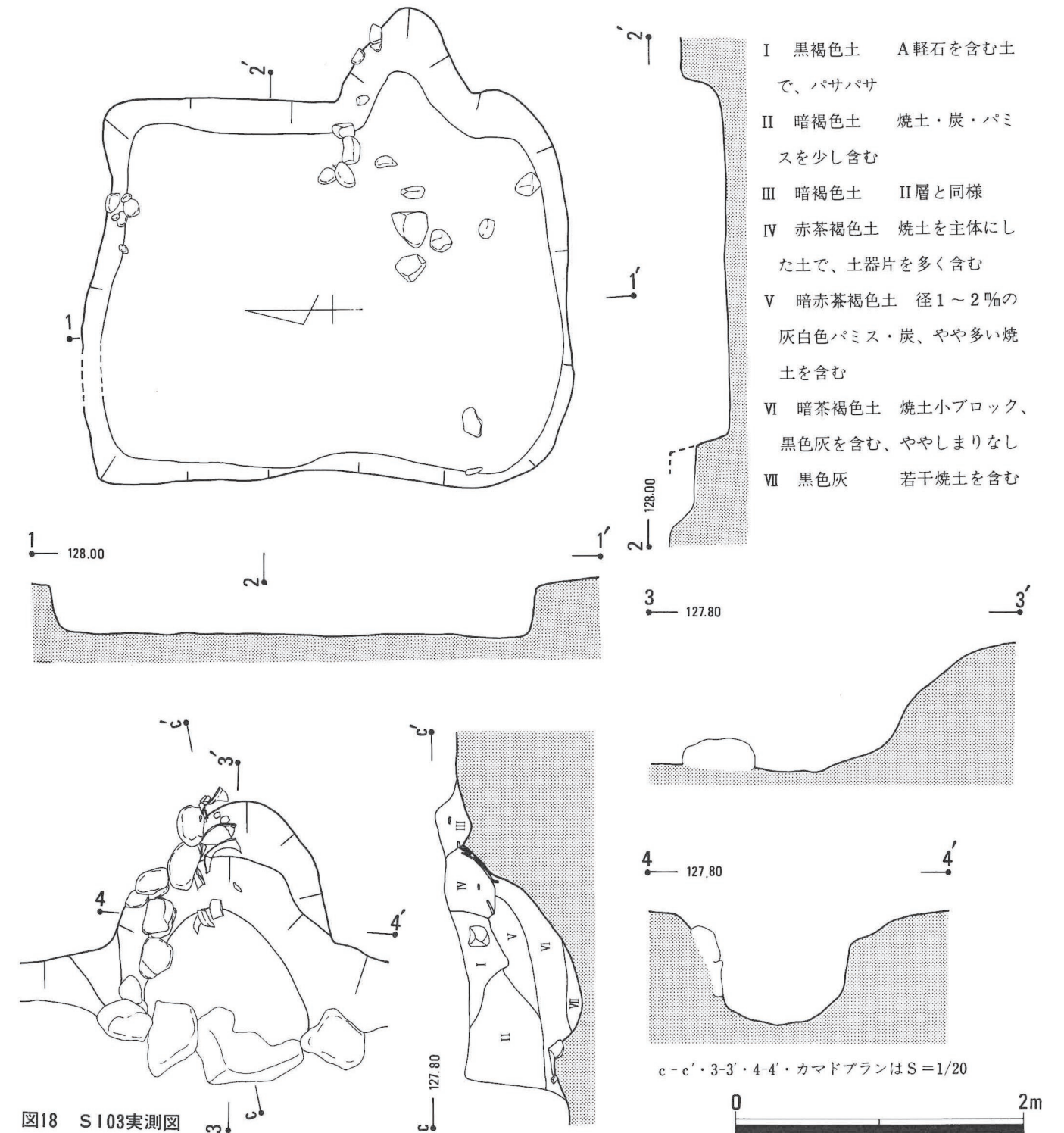
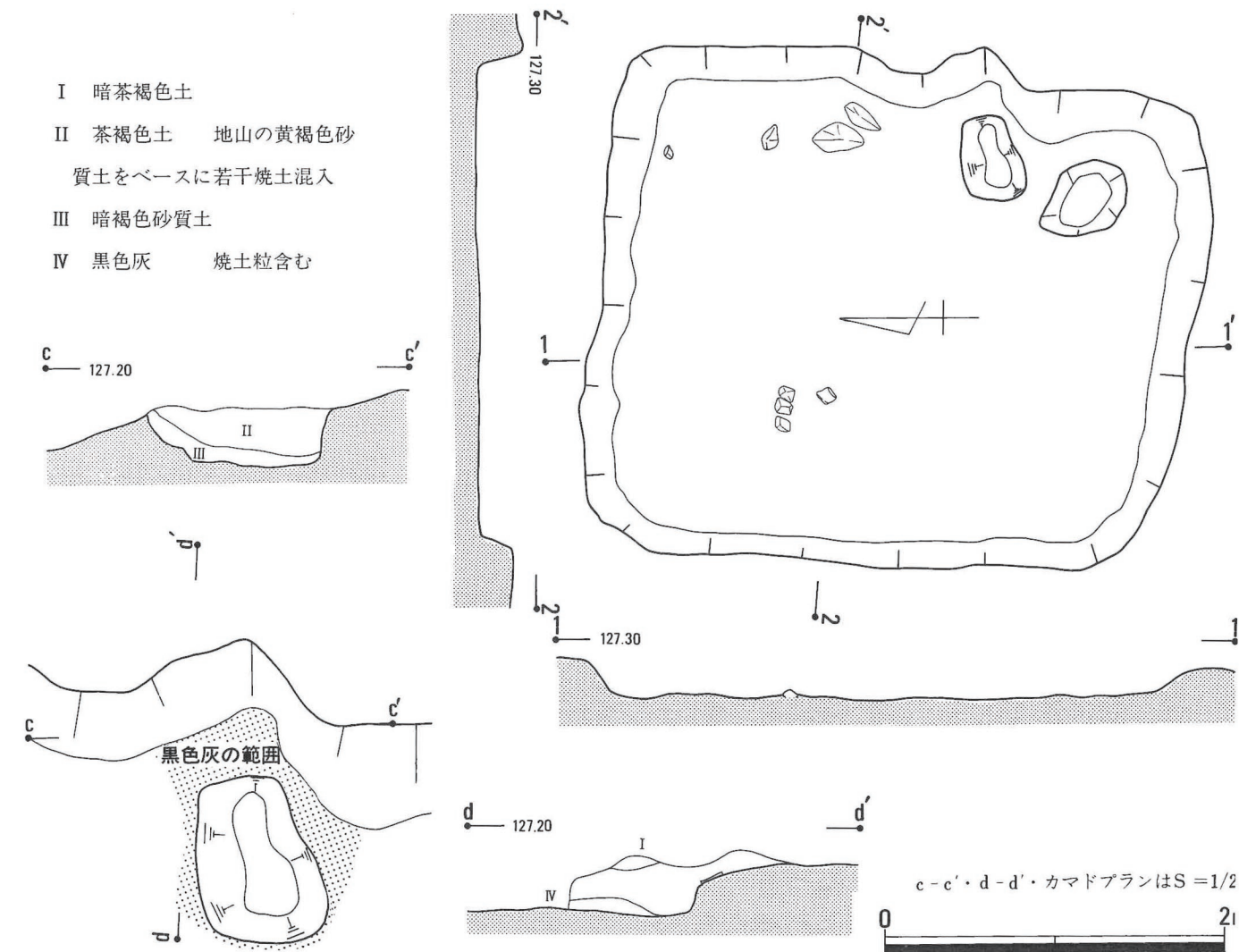
（2） 3号住居址（S I 03）

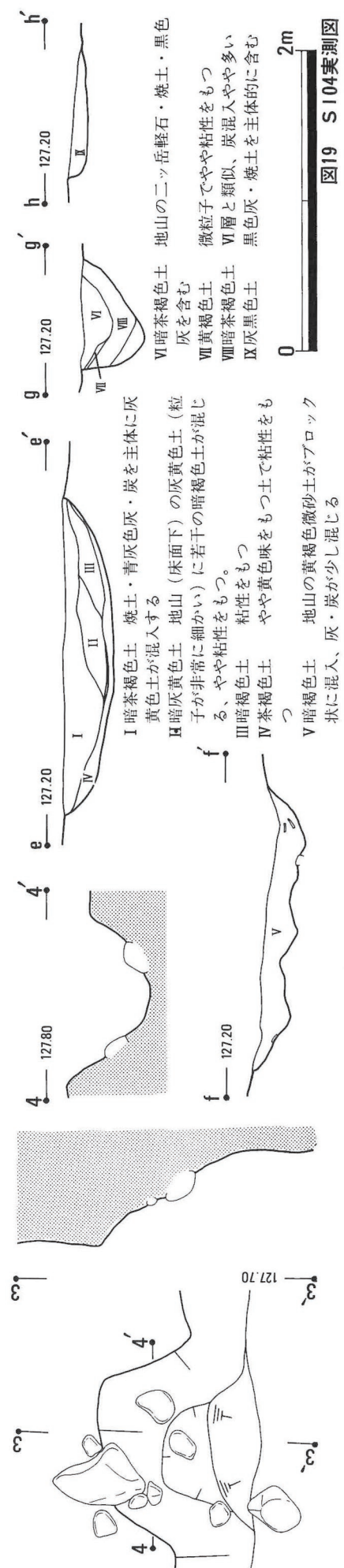
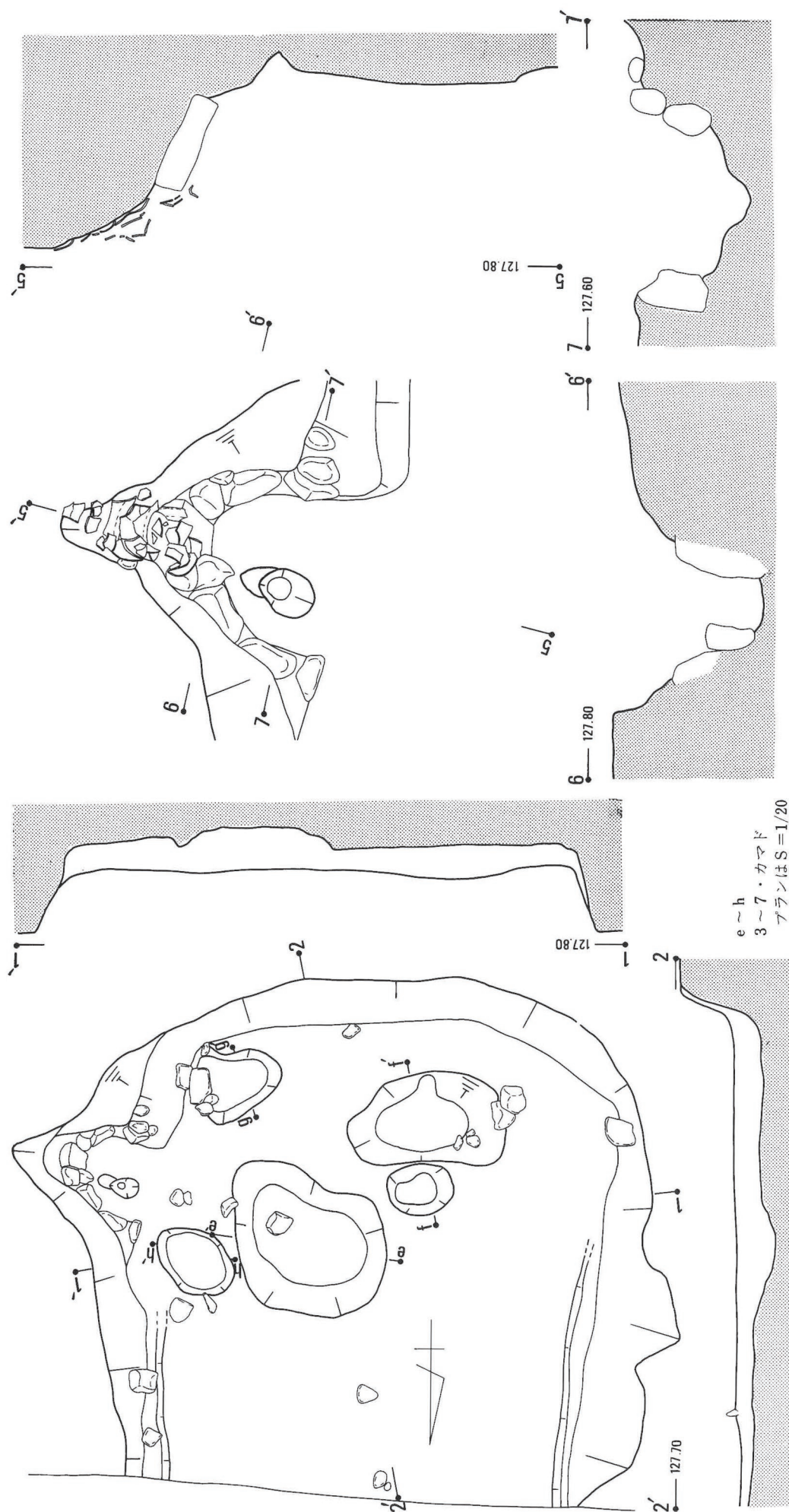
C区北側調査区の中央北壁寄りで検出した住居址である。南北3 m 20 cm，東西2 m 60 cmの平面形が長方形を呈する。長軸方向はN-0°-Eである。壁高は，現状で30~35 cm程である。カマドは，東壁中央やや南寄りにあり，壁を掘り込んで構築している。カマドの壁に角閃石安山岩を使用していたようで，左側のみ遺存していた。カマド冠材には砂岩系の石を使っていたようで，焚口付近に落ちていた。また，煙道に土師器コの字甕の口を下にして転用していたようである。貯蔵穴及び柱穴は確認できなかった。住居覆土中には，多数の角閃石安山岩が

混入していた。遺物は全体から出土したが，特にカマド周辺が多かった。土師器コの字状口縁甕形土器・坏，須恵器坏などがあげられる。

（3） 4号住居址（S I 04）

C区北側調査区の北西角付近で検出した住居址である。南北3 m 60 cm以上，東西3 m 20 cmを計測する。長軸方向をN-1°-Eにとる平面形が長方形の住居址である。この住居址は，2時期に使用されているらしく，東側カマドを使っている時期と，床をはりかえて西側のカマドを使っている時期とがある。壁高は現状で，新しい方の住居が35~40 cm，旧い方の住居が55~60 cmを測る。カマドは西壁のほぼ中央と東壁の南東角近くにそれぞれ新旧のものが位置する。東カマドは石組で，煙道に土師器コの字甕3個を口を下にして連結して転用していた。貯蔵穴は，南東角に50×60 cm，深さ35 cm程のものが確認された。他に，4個のピットが検出されている。





遺物は全体から出土しているが、やはりカマド周辺からの出土が多い。土師器コの子状口縁甕形土器、須恵器
 坏・高台付椀などがあげられる。図22の25は、内面黒色処理してある高台付椀であるが、内側底面に線刻文字が
 見られる。

(4) 5号住居址 (S105)

C区北側調査区北東角で一部確認した住居址である。一辺が6 m程の大きさで、壁高75～80cm程ある。覆土中
 位に二ツ岳火山灰層が確認されている。トレンチでの範囲確認のため詳細は明らかでない。

3. 集石遺構

C区北側調査区中央やや東寄りで検出された遺構である。径5 cm～径15 cm程の大小様々な角閃石安山岩が南北
 1.7 × 東西1.5 m程の範囲にまとまっていたものである。その中央寄りの場所から土師器坏を中心に多数の土器
 が重なって出土している。この遺構は、軽石流堆積物である軽石主体の黄褐色土層の上に、粒子の細かい黒褐色
 土が約10～15 cm程堆積しているが、この層の上に石がおかれており、土拡状の掘り込みは確認されていない。遺
 物は、前述したように土師器坏が重なって出土しているほかに、土師器コの子状口縁甕や須恵器大甕・坏・高台
 付椀なども出土している。このうち土師器坏3個体には、内面に放射状またはラセン状暗文が施されている。ま
 た、ラセン状暗文のある坏には、底部外面に「本」という字が、体部外面に判読できない字が墨書されている。
 このように土師器坏が何枚も重なって出土した例として、前橋市の柳久保水田址の例がある。これは、浅間B軽
 で埋まった水田の上面より10～17 cm下の耕作土中からの出土で、水田耕作に係る祭祀跡と見られている。本
 遺跡の集石遺構もなんらかの祭祀に関連するものだろうか。類例を集めて検討したい。

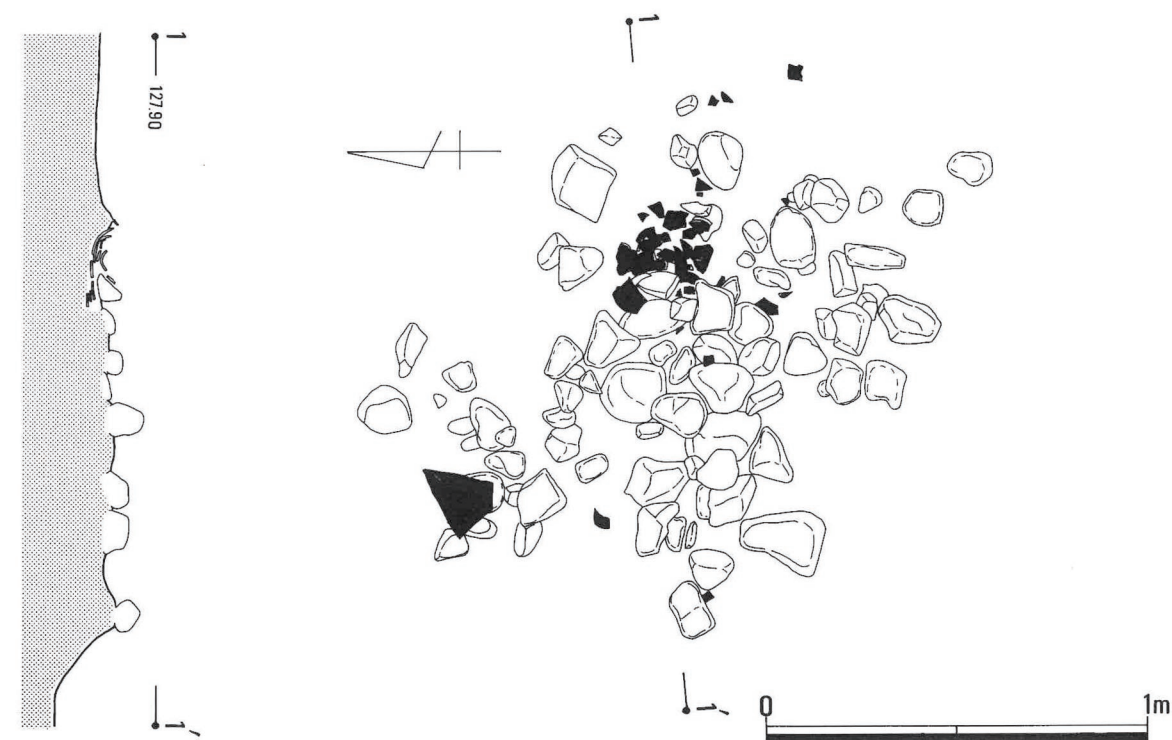


図20 集石遺構実測図

4. ピット群

C区北側調査区の中央から西にかけて検出された遺構である。32個確認された。径30～80 cm、深さ10～25 cm程
 の規模で、比較的浅いものが多い。規則的に並ぶものはないようである。出土遺物はなく、4号住居址を切って
 掘られているピット1個以外は重複が確認されなかったため、明確な時期は不明である。

5. その他

C区北側調査区の北東拡張部で、遺構に伴わないで、線刻紡錘車が1点出土している。文字は判読出来ないが、
 上面と側面に線刻が見られる。特に、側面の文字は縦や斜めの線で消されたようになっており、判読が難しい。



図21 C区北側調査区ピット平面図

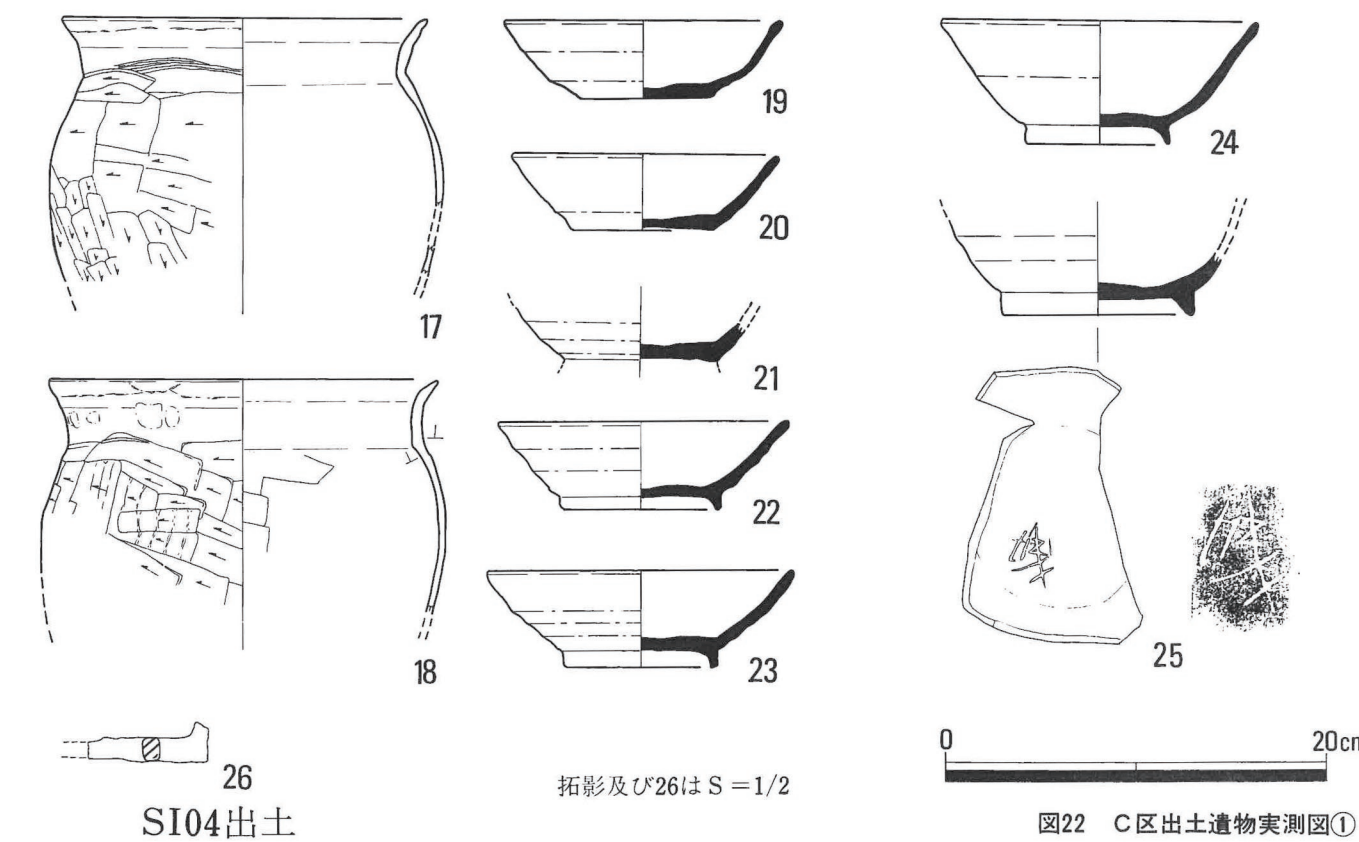
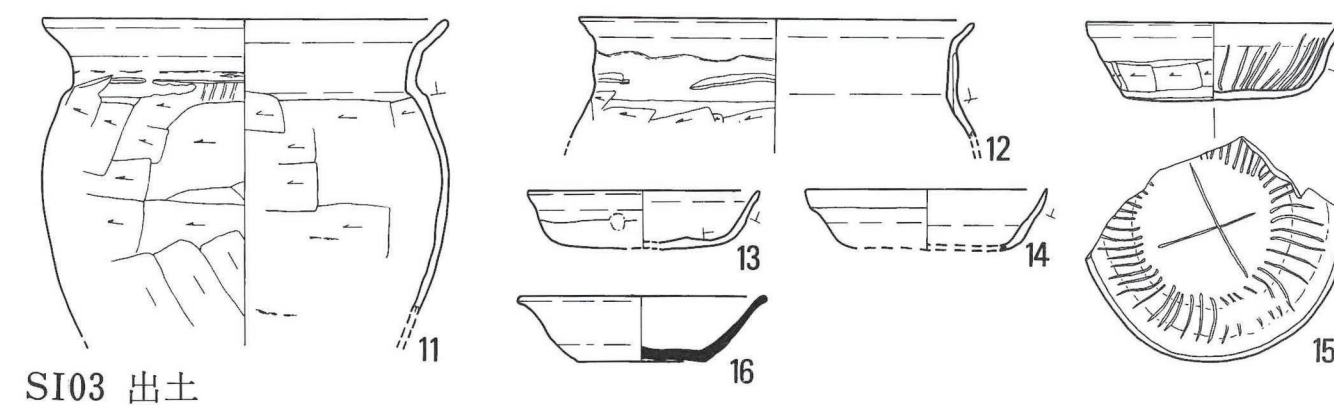
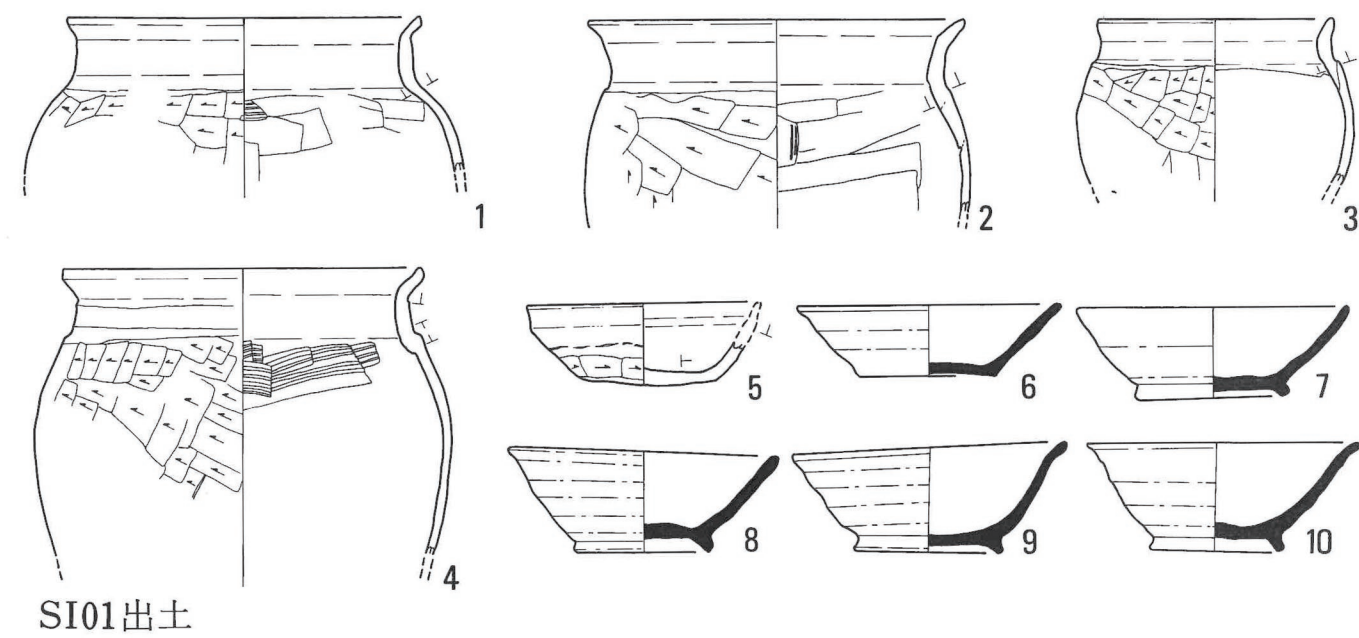


図22 C区出土遺物実測図①

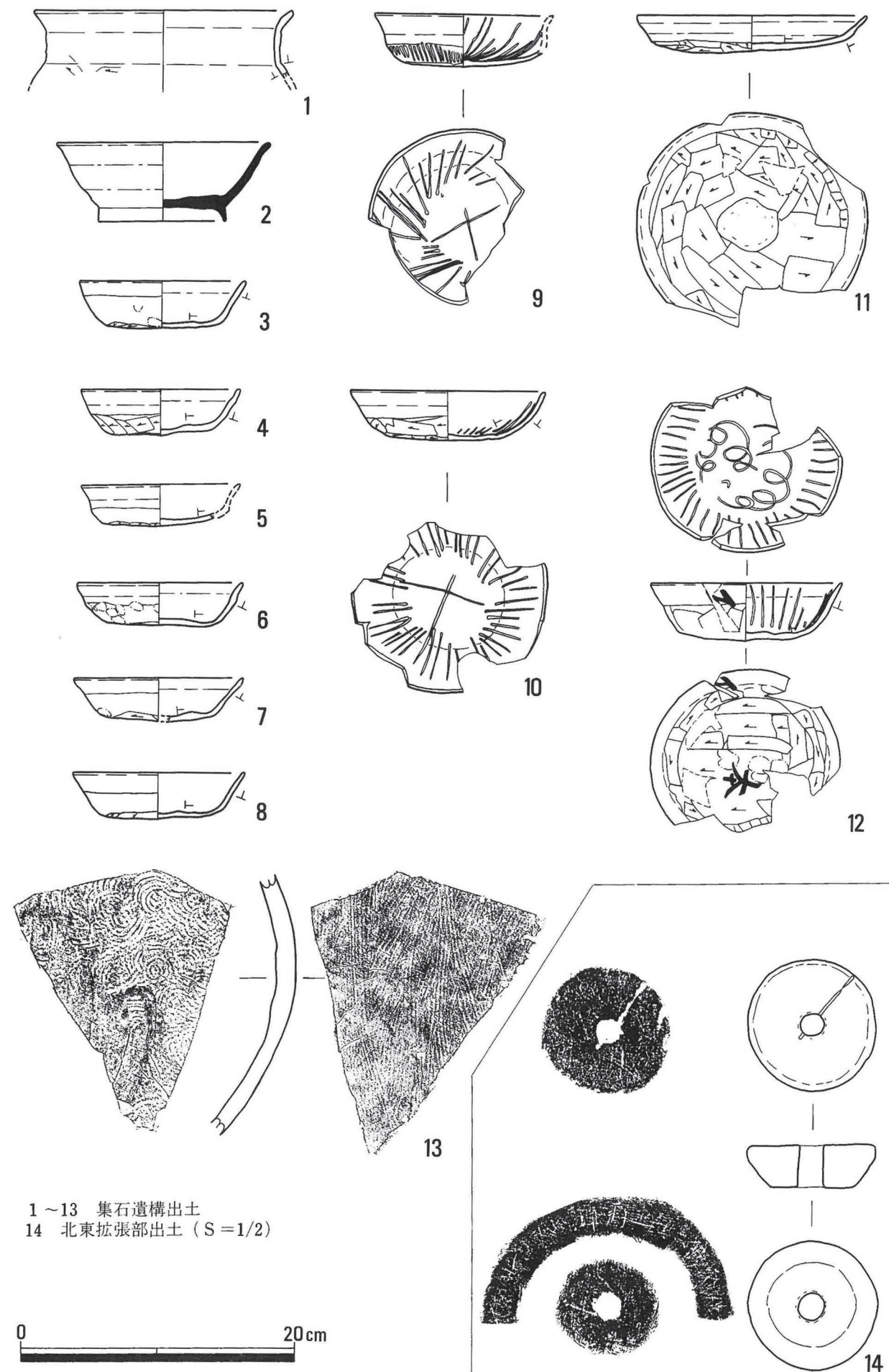


図23 C区出土遺物実測図②

6. 浅間山B軽石下水田址

A区と呼ぶ谷津遺跡北東部では、浅間山降下B軽石層に埋没した水田址が広範囲にわたって検出された。以下その概要についてトレンチごとに見ていくことにする。

●1トレンチ

調査区の中ほどに設定した東西76m、南北5m程の東西に長いトレンチである。水田面までは、現地表から70~80cmで達する。B軽石の遺存は15~20cmもあり、大変良好である。水田面の最高標高は、西端で128.25mを測る。東のSD01寄りの水田でも128.00mで高い標高値をとる。2トレンチとつながる付近の水田で127.80mで最低標高となる。即ち、西と東が高く、中央が低くなっているのである。水田の形状は、基本的には長方形を呈している。等高線の走り方から見ると、南北に長辺をとるようである。畦畔は、下幅約40~50cm、上幅約15~25cm高さ約10cm程のもので、太い畦畔は見られない。水利施設としては、水口が3カ所で確認された。上幅約30~50cm、深さ5~10cmを測る。水口3では、水田面のレベルが低い南側水田に凹みが見られる。トレンチの東端で、上幅約11~13m、深さ約40cm程の溝状遺構(SD01)が南北方向で検出された。SD01の東は、西側の水田に比べて約30~50cm程高くなっている。ここには、B軽石が全く無く、水田が存在したかどうかは不明である。SD01は標高の高い所を通っており、給水の機能を持ったものと考えられる。SD01の西には、上幅約2.5~3.5m程の畔道のような遺構が検出された。この上には角閃石安山岩の礫が多数認められた。また、水田面には径10~20cm程の半円形あるいは、角のとれた三角形を呈する小穴が多数検出された。この小穴は、水田面全域に認められるものではなく、ある範囲に集中しており、ある程度の規則性もうかがえる。鋤跡であろう。水田下の地層の様相は、水田面から15cm下で軽石流堆積物層が現れる。

●2トレンチ

1トレンチの中央から南へ伸びるトレンチである。水田の形状は長方形を呈する。水口3のすぐ南の南北畦畔には、東側に沿って上幅約50cm、深さ約5cmの浅い溝がみられる。途中までは明瞭であるがその南ははっきりとしなくなる。ちょうどこのあたりから、南北畦畔の西側に同様の浅い溝が現れてくる。さらに、その南の南北畦畔でも水口6を流れた水が通ったように畦畔東側に沿って浅い溝が認められる。1トレンチからの水の動きが推測できる。

●3トレンチ

1トレンチの北約30mに設定した南北のトレンチである。ここでは、南西方向への落ち込みが検出された。落ち込みの東側は、1トレンチの東端と同じく軽石流堆積物層で水田が作られた様子は見られない。

●4トレンチ

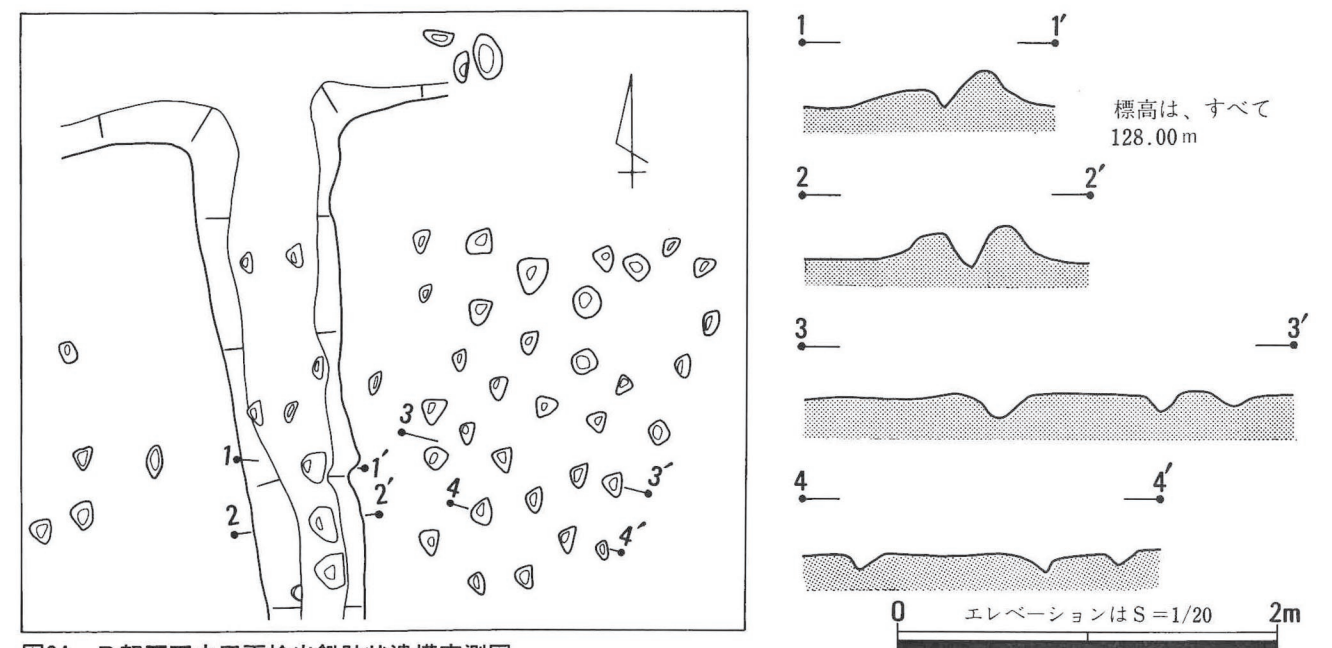


図24 B軽石下水田面検出鋤跡状遺構実測図

2トレンチの南20mに位置する。ここでは北から上幅約50cm、深さ約10cmの水路が出ている。東西畦畔は20cmの段差を持つ。この畦畔に平行して高さ5cm程の低い畦畔が断続的にみられる。2本の畦畔の間は、深さ約5～10cmの浅い溝になっている。水路を流れてきた水が、東西畦畔を越え、浅い溝にしたがって東西に、あるいは南へ流れていくことが推察される。

●5トレンチ

4トレンチの南20mに位置する。ここでは、東西畦畔が1本検出されたただけである。畦畔は北側での立ち上がりは弱く、南側で大きく落ちる階段状を呈する。水田面も平坦である。

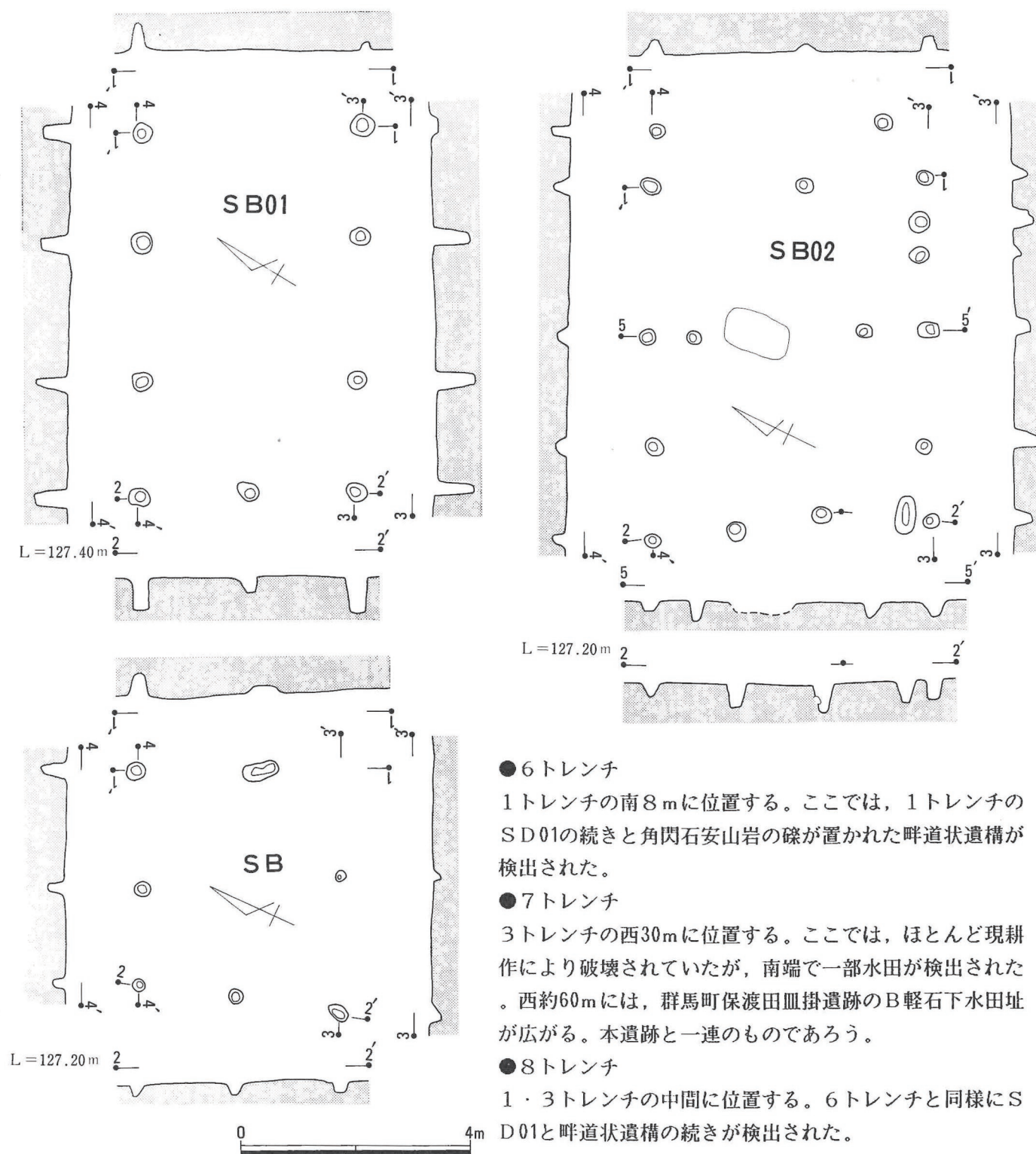


図25 C区南側調査区掘立柱建物址実測図

●6トレンチ

1トレンチの南8mに位置する。ここでは、1トレンチのSD01の続きと角閃石安山岩の礫が置かれた畦道状遺構が検出された。

●7トレンチ

3トレンチの西30mに位置する。ここでは、ほとんど現耕作により破壊されていたが、南端で一部水田が検出された。西約60mには、群馬町保渡田皿掛遺跡のB軽石下水田址が広がる。本遺跡と一連のものであろう。

●8トレンチ

1・3トレンチの中間に位置する。6トレンチと同様にSD01と畦道状遺構の続きが検出された。

7. 館 址 (乙業館址)

C区南側調査区で検出された遺構である。井野川右岸上に位置し、調査前の現況でも西から南にかけての掘割が痕跡をとどめており、山崎一氏の研究によれば長野乙業の館址であるとされている所である。館址推定範囲の南2/3程が土地改良工事の影響を受けるため、面的に調査を実施した。その結果、現況どおりの所から堀が検出された。だが、堀の西側立ち上がりは道路の下で、南側立ち上がりは調査区外へのびてしまい、規模が明確につかまえられなかった。上幅8m以上、深さ2.5m以上となる。堀に沿って内側に土塁が巡っていたようで、その基部が多少残っていた。幅4～6mを測る。土塁の内側には掘立柱建物址が3棟発掘された。SB01は2×3間、SB02は3×4間、SB03は2×2間である。3棟ともほぼ平行する位置関係にあるが、SB01のみやや西に振れる。また、土塁の中に入ってしまう可能性もあるが、内側寄りの所に1.8～3.0mの間隔でピットが並ぶ。他にもピットがたくさん検出されたが、まとまるものはなかった。土塁もいくつか確認されているが、SK04は上端で2.6×3.0m、深さ1.2mほどで規模が大きい。SK06は2.0×3.4m、深さ18cmほどである。館址でしばしば検出される方形の竪穴遺構のような感じもするが、遺物やその他の手がかりもないため不明である。調査区の北東で、上幅1.5m、深さ16cm、長さ19m以上の溝(SD01)が確認された。これより北東の部分は、掘立柱建物址のある中央部寄り20～30cm程高くなっている。遺物は、かわらけの破片と軟質陶器の鍋の破片が数点みられるが、館址に関連しそうなものは極めて少ない。今回調査できたのは、北側調査区を含めても南北60m、東西33m程の範囲である。東側は井野川で限定されてしまうが、北側あるいは堀を越えて西側に中心部分があるということも考えられる。

IX 高田・館遺跡

1. 浅間山B軽石下水田址

高田遺跡A区1・2・5トレンチ、B区1・3・4トレンチで検出された。場所により異なるが、現地表下35～70cmで水田面に達する。15～20cmの厚さでB軽石が良好に遺存する。周辺の遺跡でのB軽石下水田址の分布状況からすれば、本遺跡の範囲では全面的に広がっていたものと見られるが、上に中世遺構が作られたため削平をうけている場所も広く認められる。基本的な形態は今回報告の他の水田址と変わらない。

2. 館 址 (高田屋敷)

調査前の現況で、北及び東で掘割りの痕跡が、また、北東角で土塁状の高まりが確認されていた。このため、全体の範囲と内部の状況を調査するためにトレンチを設定した。

●堀 跡

B区2～7・9トレンチで確認した。2トレンチで上幅7.3m、3トレンチで上幅4.8m、5トレンチで上幅6.1m、6トレンチで上幅3.0m、7トレンチで上幅5.5m、9トレンチで上幅4.3～5.5mを計測する。深さは、湧水が多く堀底まで調査できないものがほとんどであったが、3トレンチで1m余りである。この結果、北辺の堀は9トレンチと4トレンチでそれぞれ東と西の角が検出され、長さ116mになることが明らかになった。東辺の南の角と西辺の南の角は、調査区域外になってしまうよう確認できなかった。現状で計測すると、東辺は長さ108m以上の規模となる。方形あるいは南北に長い長方形に堀がめぐっていると推定される。

B区4トレンチで検出した堀の北西角には、北から上幅2.6m、深さ80cmの溝(B区4トレSD01)がつながる。これはSD01が直接つながるのではなく、SD01は直前で完結し、堀との間の1.7mに上幅20cm、深さ20cmの断面Uの字形の溝を設置してつないでいる。この溝の途中には、径20cm程の石を2個おいている。B区4トレSD01から堀へ水を導入する際、水量を調節するための溝及び石と考えられる。なお、B区4トレSD01は、北10m程に設定したA区4トレンチ検出のSD01または02につながっていくものとみられる。

●溝 (SD02)

B区1・2・5・8トレンチで確認した。1トレンチで上幅1.0～2.2m、深さ45～50cm、2トレンチで上幅3.0m、深さ40cm、5トレンチで上幅2.5～3.0m、深さ35～45cm、8トレンチで上幅2.0～2.2m、深さ75cm

を計測する。1トレンチでは、北から南下し、西に折れ再び南下する。調査区南西部で不明瞭になる。再び南下する所は若干幅広になってから、細くなる。2トレンチでは東西に走り、5トレンチでは東西に走り、西端で南下して1トレンチSD02に続く。8トレンチでは東西に走り、東端で南下する。この南下したSD02は、3トレンチで検出されないので、9トレンチと3トレンチの間で東へ折れて堀に続くことが推測される。

●土 罫

9トレンチの北東角で堀に沿って内側で約54m程検出した。土罫の盛土部分はほとんど削平を受けており、基部の盛土が20～25cmの厚さで残っていただけであった。幅は約6m程と見られ、北東角のみ約10～12mと広がっている。この広がっている部分からは柱穴・ピットなどの遺構は検出されなかった。断ち割り部のセクション観察によると、浅間B軽石層の上に約30cmの自然堆積層があり、その上に盛土を行っていることが分かった。9トレンチ以外での土罫については、2・3・5・6の各トレンチでの状況では、存在したかどうかの手掛かりは全くつかめなかった。

●掘立柱建物址（SB01～18）

SD02によって囲まれた範囲は、東西約80m、南北60m以上もあり、本遺跡の中で最も広い場所になっている。ここで掘立柱建物址が18棟確認（うちSB12～18は図上復元）された。建物は、SB01・02を除いたほかは中央より東側に多く見られ、さらに東1/3ほどに集中している。この東1/3ほどの所は、まだピットがたくさん検出されており、建物などが増える可能性があるところである。重複している建物もいくつか見られる。建物の規模は、2×3間のものが多いようである。建物はSB01・03・09・10が南北棟であるほかは、東西棟である。建物の主軸は、重複しているものも含めて館址の主軸またはその直交方向になっており、建物配置に計画性がうかがえる。SB05は東側に、SB11・14は南側に、SB15は北側にそれぞれ底を持っている。SB11が確認された中で最大の建物で、身舎は5.5×9.2m、底の幅は1.3mである。柱穴は径30～55cm、深さ40cmを測り、柱痕から判断すると、柱の太さは約20cmである。SB07は、柵列01・02・05によって囲まれる中に位置しており、なんらかの意味があるのだろうか。建物址を検出したのは1トレンチ内だけで、他では確認していない。

●柵 列（柵列01～10）

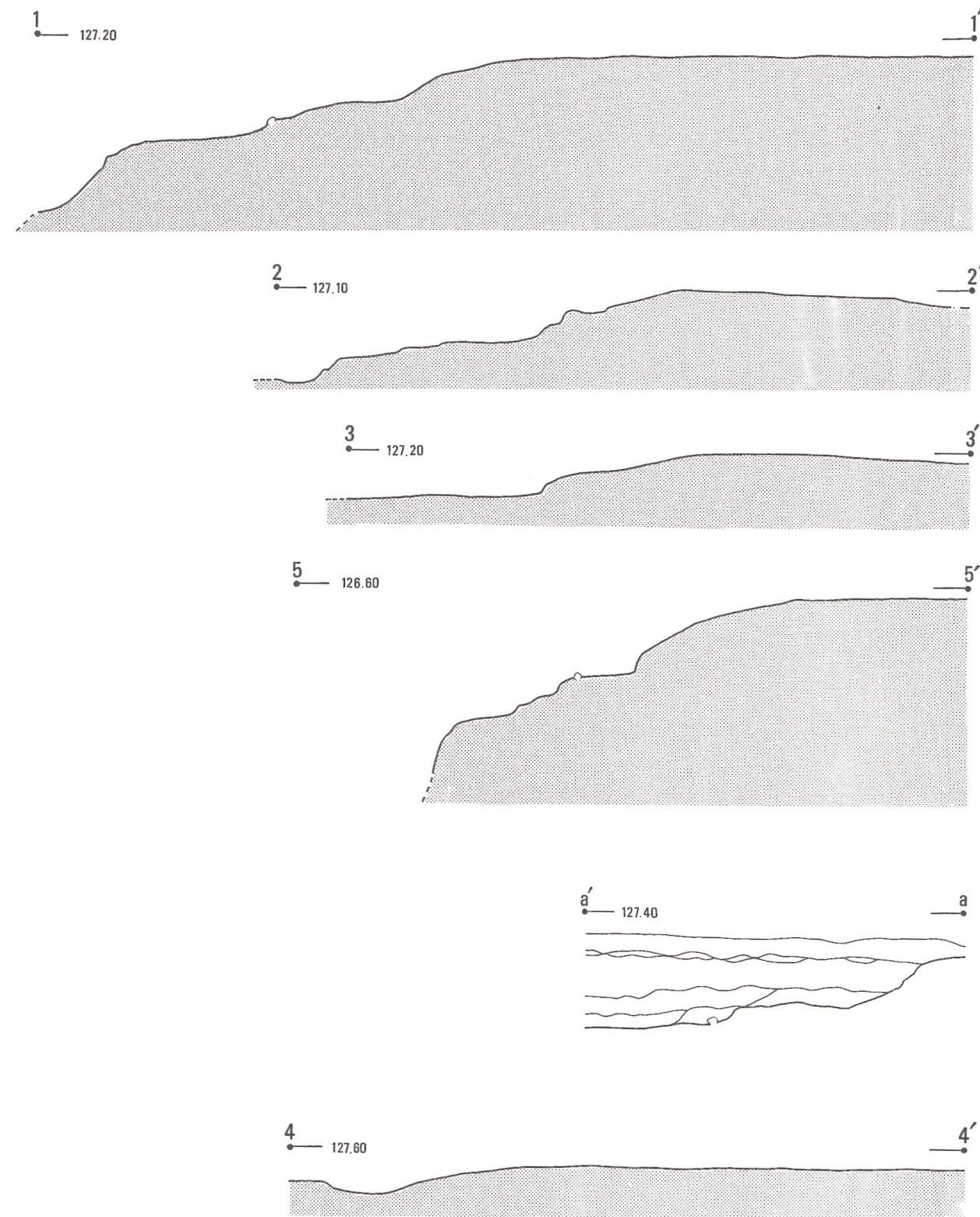
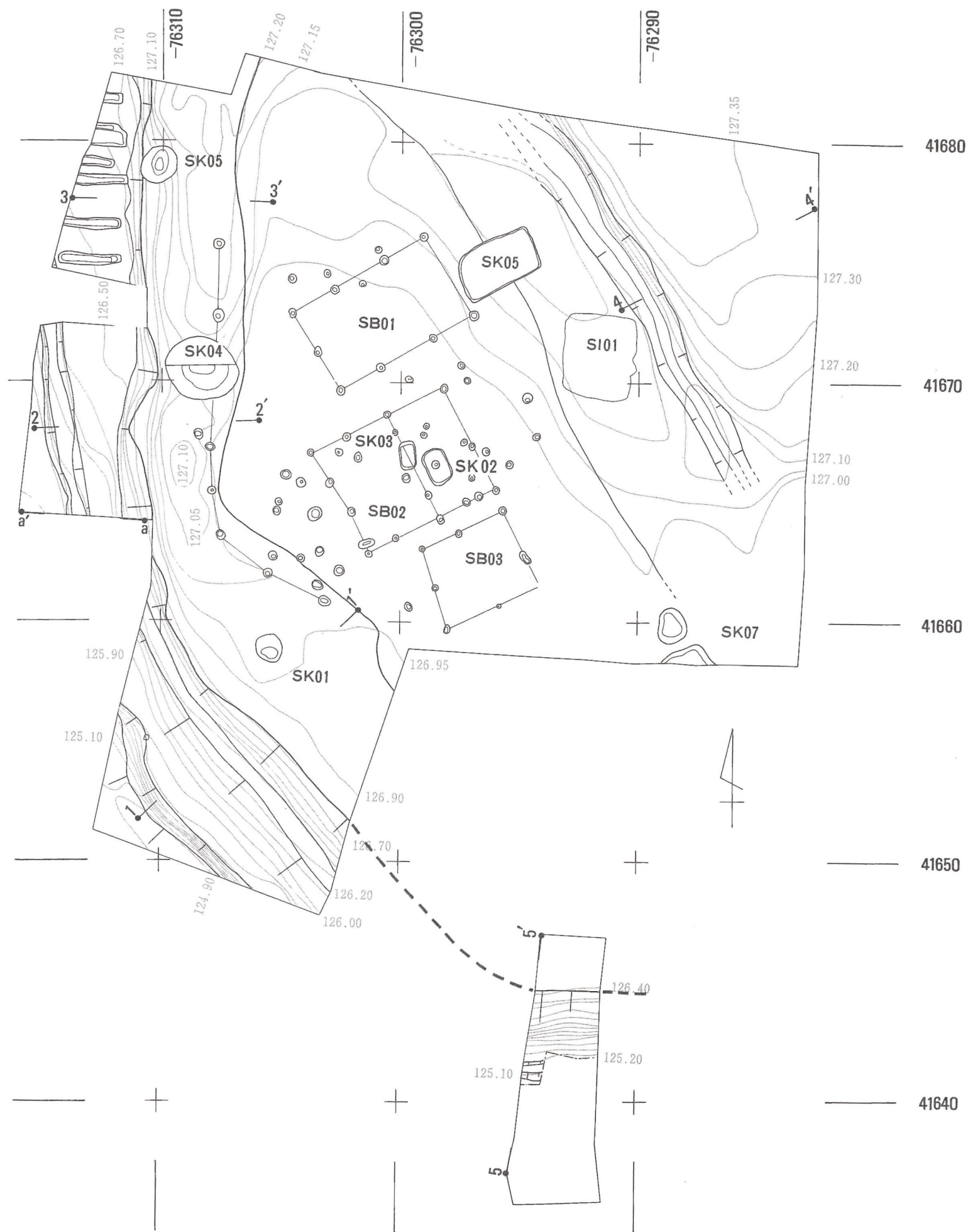
10条の柵列を検出した。このうち、柵列01・02・05は3条とも長さ15mで、各々直交して北に開くコの字状を呈する。柱穴の規模は、径30～55cm、深さ20～50cmを測る。これらの柵列に囲まれた中は、中央から少しはずれてSB07が、ほぼ中央にSK02が、他にいくつかの土壇・ピットがあるが、周囲に比較すると空白部分が多いことに気がつく。また、この部分は堀に囲まれた範囲のほぼ中央に位置しており、なんらかの特別に意識された空間であったことが推測される。柵列03と04、柵列06と07は、それぞれ8.5m、5.5mの長さで、南北に並行している。

●土 壇（SK01～47）

大小様々な土壇が多数検出された。実数は47基以上ある。検出場所は全域にわたるが、中央のコの字形柵列より西で、特に、SD02が北から西へ屈曲する付近にまとまってみられる。この土壇は、1.0～1.6×0.6～1.0m、深さ30～50cmのものが多く、また、かわらけ・古銭・五輪塔の一部・宝篋印塔の一部・人骨・歯などが出土しており、土壇墓と考えられる。SK46は他の土壇と様相が異なる。南北2m以上×東西1.6m、深さ25cmを測るもので、石組が見られる。石組の中は南北1m以上×東西35cmの範囲が空いており、灰だけしかはいつていなかった。遺物としては、古銭・かわらけ・人骨などが出ている。ここで火葬されたものだろうか。SK47は南北3.8×東西1.8m、深さ50cmを測る。かわらけ破片が出土しているだけで他にはない。他の土壇とは性格が異なるものか。

●井 戸（SE01）

1トレンチ南東部で検出された遺構である。南北3.45×東西3.55mの円形の堀り形に、35～60cmの石を積み上げて作った石組井戸である。井戸の内径約1m、深さ1.5m以上の規模である。覆土中から五輪塔の水輪が、西側の石組外から聖観音菩薩の座像が1点出土している。井戸の周囲も広範囲に空白地帯が広がる。



エレベーション・セクションはS=1/80



図26 C区館址実測図

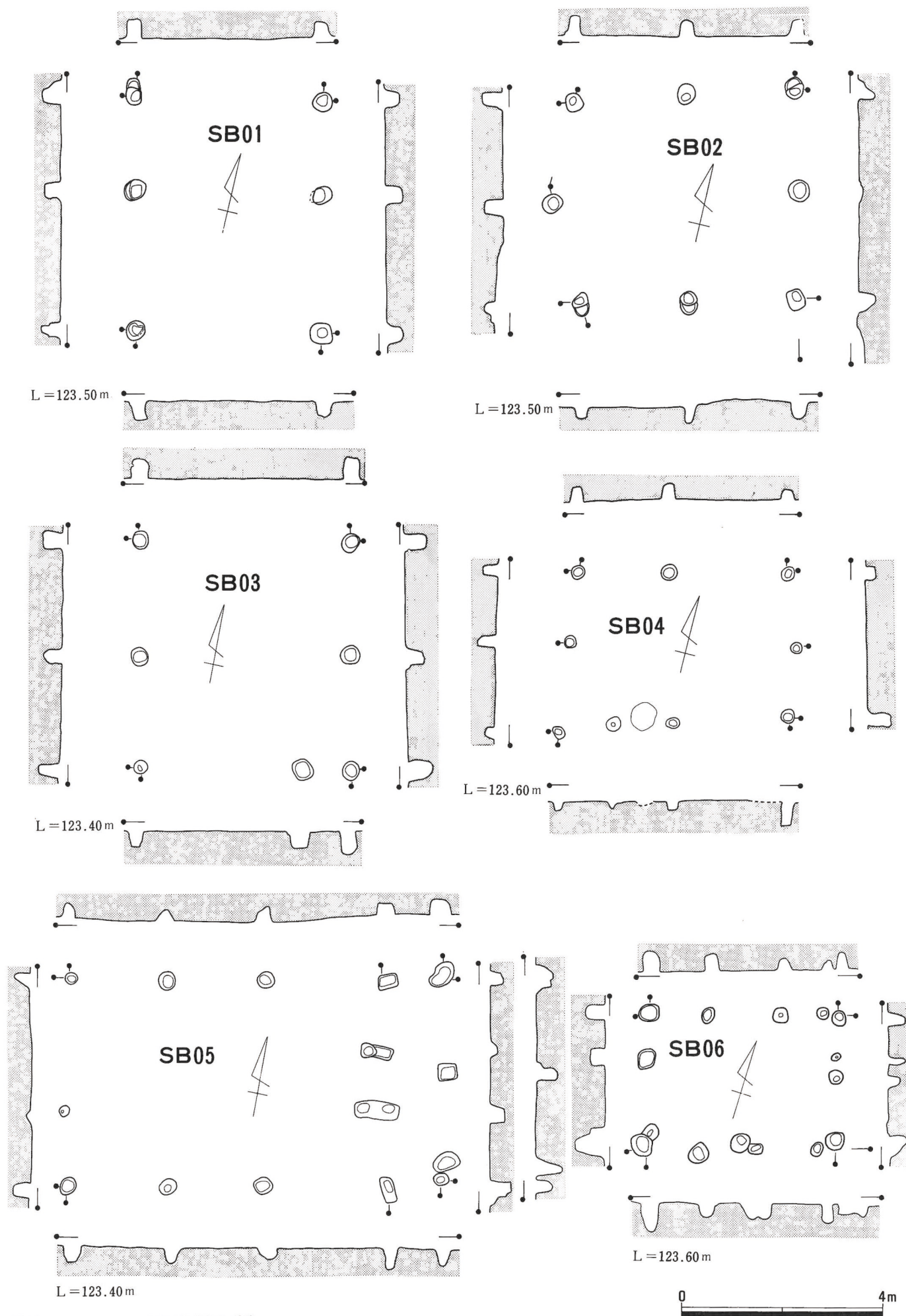


图27 B区掘立柱建物址实测图(1)

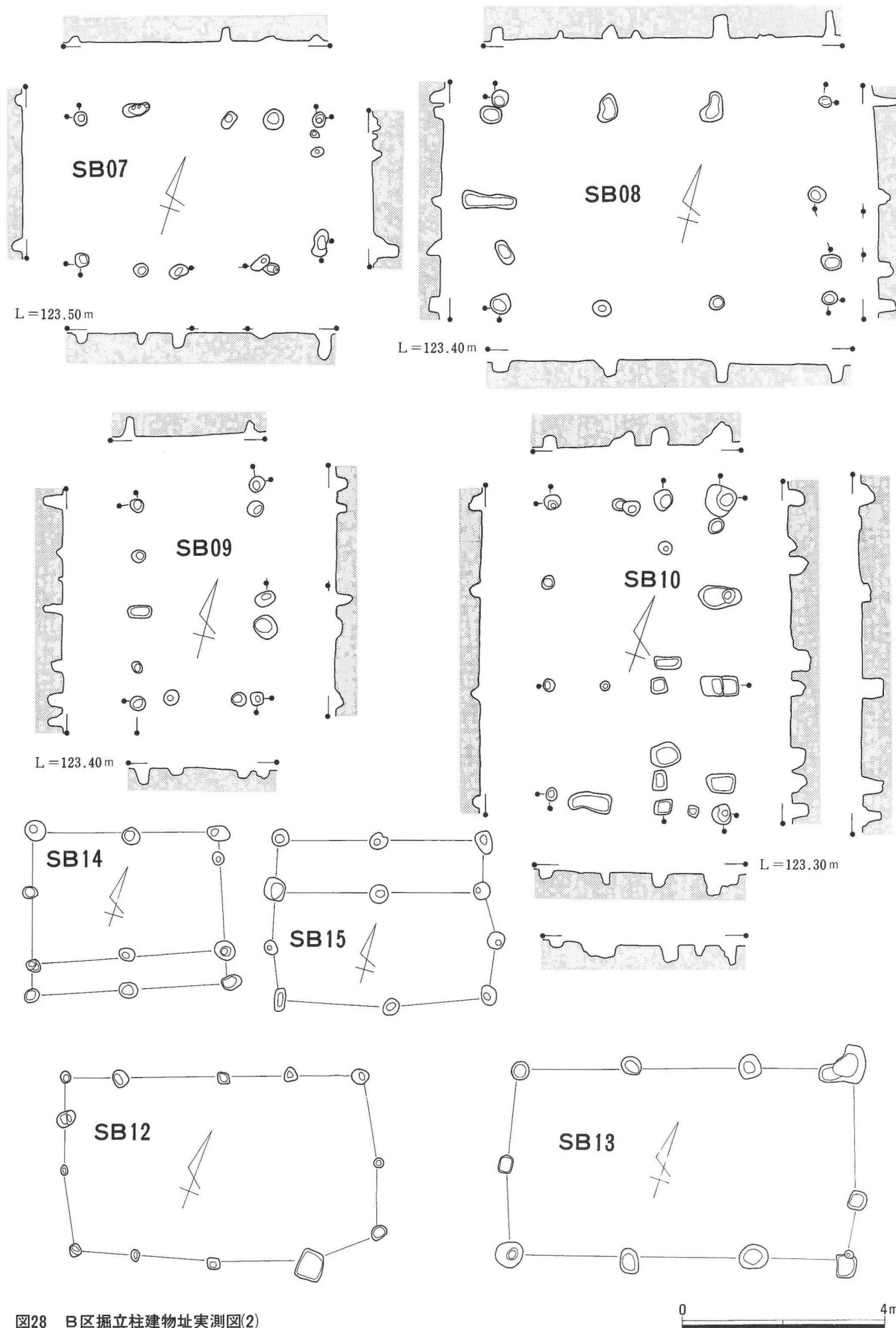


図28 B区掘立柱建物址実測図(2)

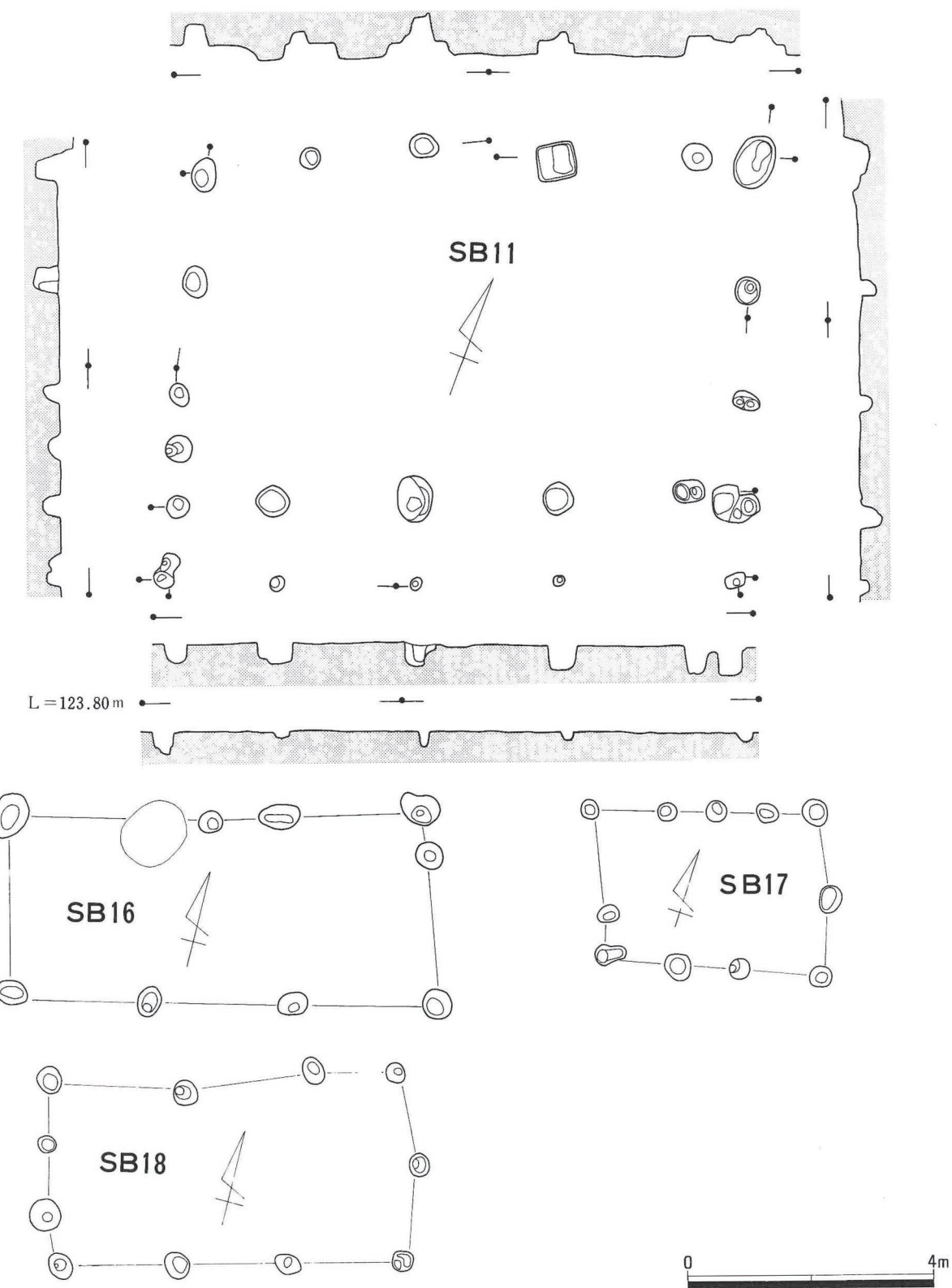


図29 B区掘立柱建物址実測図(3)

●性格不明遺構 (SX01)

土坑墓群の一角で検出された。土坑と黒色灰・炭の集中している部分からなる。土坑は南北90×東西48cm、深さ30cmを測る。歯・人骨・火輪1個が出土しており、墓であろう。他の部分は、断面観察によると土坑状に掘り込まれ、宝篋印塔の塔身・火輪2個が底に置かれ、燃やされたような印象を受ける。塔身と火輪に炭・灰・焼土が密着していることや、それがきちんと並んだように転倒していることなどからである。ここで火が燃やされ、塔身や火輪がその影響を受けていることだけは確かであるが、何のために行われたのか不明である。

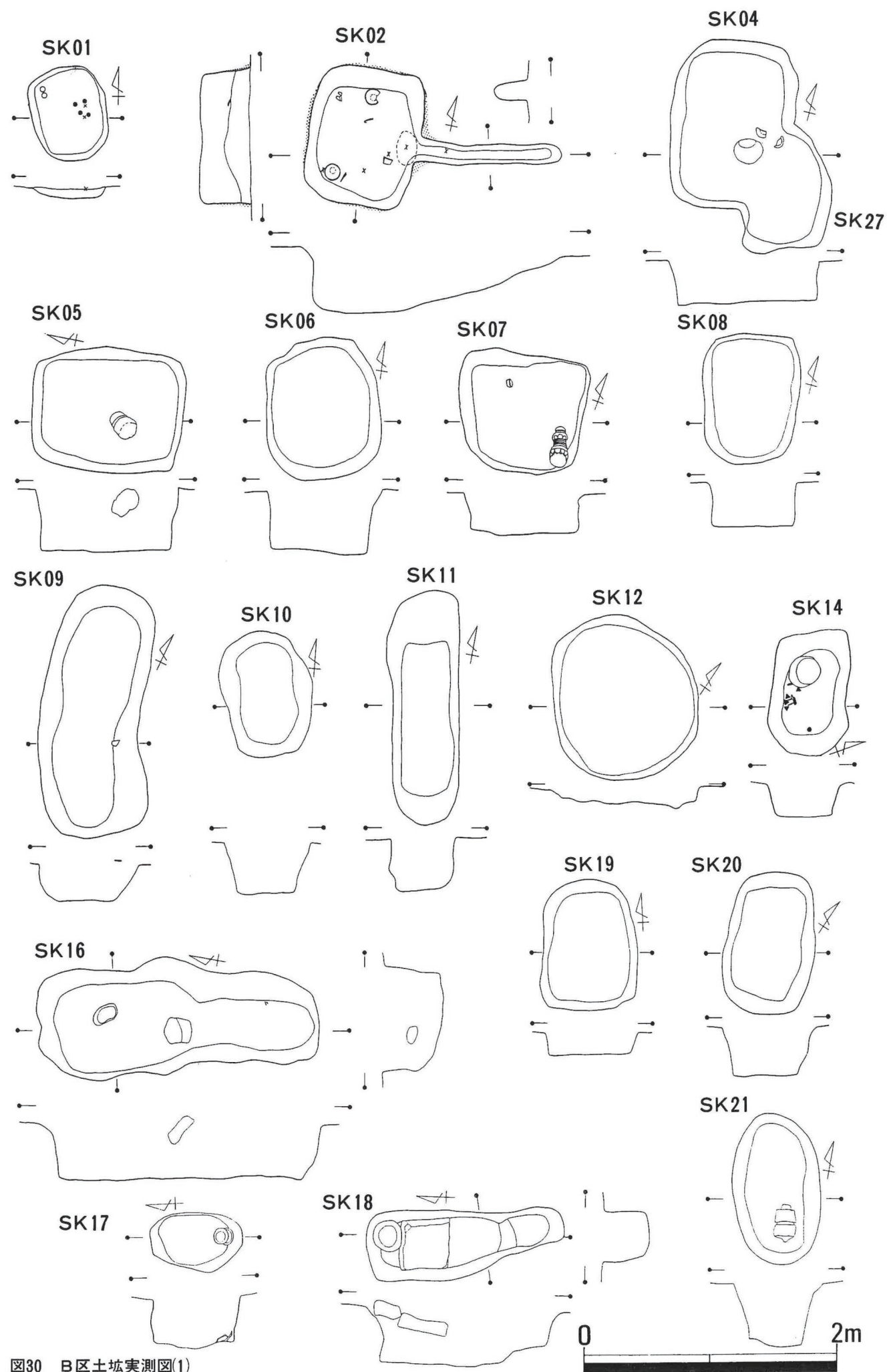


图30 B区土坑实测图(1)

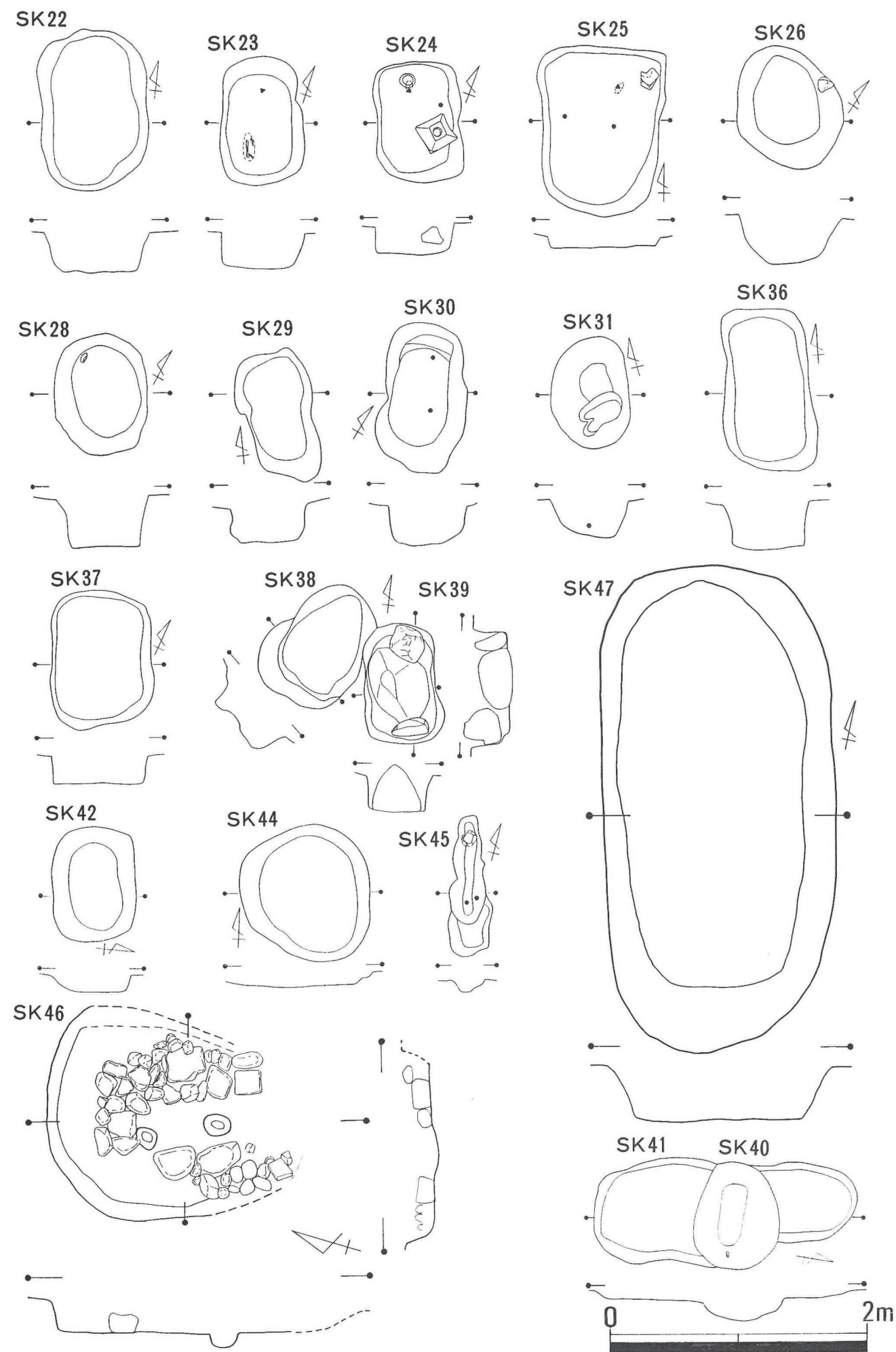


图31 B区土坑实测图(2)